

東北の古兵が野戦下番となって去ったあと、私たちが古兵になった。そしてこの襲を継承することになる。

「ヨスダ、かんにんしてけるや」

と肩を叩いて去って行った古兵殿の顔を、今でも何人か思い出すことが出来る。

三中隊の襲は厳しかったが、私たちはまた同僚同志、必死にかばい合った。

張店の屯営にいた頃である。一等兵に進級していた。日夕点呼の後、ある古兵の上等兵に呼ばれた。

井土宇吉を撲れという。私は唇を噛んだ。同郷の部下を撲れるものでない。その古兵は、中隊下に呼び出して撲れオレは音を聞いているぞと云う。いやな役目である。井土を呼んだ。中隊下の暗がり呼びこんで、小さな声で云った。おい、貴様に気合いを入れるぜよ。軍袴(ズボン)をずらせて、ケツを出せ。井土は首肯した。あののん、景氣のええ首を立ててくれや。よっしゃ、やるぜよ。

私は大声で呷った。「貴様ア、態度がぶとい」

七発叩いた。あとで古兵が云った。

「オウ、今夜の気合いは甲の上だべ」

あれから三十年が経つ。私には昨日のこのように思われる。

復員後、永い社会人生活を営んで来たが、あの頃のよう

な訓練と友情を経験したことはない。これは私ばかりではあるまい。死生苦楽を共にした仲間というものは、容易に得られるものではないからである。その紐帯は不思議に今でも続いている。三中隊の会合と云えば、何を措いても出かける私である。

(〒486 愛知県春日井市上八田町六三六九)

TEL0568(82)4534

馬鞍山の戦闘

足立泰造

華北戦線の、馬鞍山の戦闘についてかくよう、編集委員会から連絡をいただいた。指を折って見ると、あの戦闘からもう三十年の歳月が流れている。

当時苦勞を共にした戦友たちは、苛烈な沖繩戦で戦死した方もあるし、敗戦や戦災で苦しい思いをされた方も多いであろう。私が戦った馬鞍山の戦闘は勿論激戦ではあったが、その方々に較べると、まだまだ生易しい方に属するかも知れない。馬鞍山は中国山東省、博山県にある山また山の天險である。戦闘は昭和十七年十一月九日の朝からはじまった。丁度前日の十一月八日、第二十一大隊の無線機が故障した為、私は旅団司令部のある博山の附近まで命令受

領に行った。大隊の所在地から約一時間の行程であったと思ふ。

その時、私が旅団參謀から直接受領した命令は、「明朝(九日)馬鞍山ノ敵四〇〇ヲ攻撃スベシ。但シ午前中ニ攻略出来ザル時ハ、次期作戰ノ為転進シ、後命ヲ待ツベシ」という内容であった。參謀は附け加えた。

「馬鞍山は、二十五大隊が散々苦勞しとる要害だ。手ごわいぞ」私は一刻も早く、この命令を部隊長に届けねばならない。さて、と地図を拡げた。部隊と別れてからすでに約一時間経つ。図上を見る。これなら、前方の山岳を登れば、すぐ本隊に追及出来る。これが最も安全な近道だろうと判断した。

參謀から貰った焼き手を四人の部下にわけ、私もその一つを頬張って、ぐんぐん歩度を伸ばした。日射しは、夕陽の色を帯びている。山岳地帯にかかった。胸を衝くような急坂である。道の片方は、目もくらむような切り立った断崖。銃を担った部下の呼吸が荒くなる。登って行く尾根の向うに霧霧に覆んだ目標の山が屹立する。——急げよ、と目頭で部下をせきたて、險道を登って行った、やがて中腹である。額を汗を右手で拭いた瞬間、坂の上方に、ちらと人の動く気配がした。敵? 山岳地帯に散って右手を挙げて、部下を制した。兵はさっと崖下に散って

銃を構える。

私は、伏せたまま目を振り上げた。枯れ草の向うに、一人の中国兵が現れた。

軍刀を抜いた。

なおも注視する。

中国兵は銃をもっていない。ふらふらと歩いて来る。右手に何かを下げている。

ぐいと後ろの部下が私の肩を押して前に出ようとする。私はそれを制して、息をこらした。敵兵は私たちを発見した様子もない。何をしてるんだ。私が身を乗り出した時である。

中国兵は急に崖に向って跳みこんだ。

とたんに閃光が走り、鈍い爆発音が起った。中国兵は岩角を蹴上げて泳ぐように空中に浮かび、そのままの姿勢でゆっくりと谷間に落下していった。

手榴弾の自爆である。

戦場に感傷は禁物であろう。しかし、うら若い敵国の青年の死は、私の心を刺した。

——前へ。私は軍刀を振って、その脇を駆け登った。

夕陽のなかを山頂へ登りついた。

「あ、うちの部隊です」

兵隊が声をあげる。なるほど四キロ程前方を、一列縦隊

の長い隊伍が動いて行く。

よし、追いつけるぞと思つた。急に、山頂の辺りが騒がしくなつた。敵である。かなりな集団らしい。構つては危い。下山に移つて暮れきつた夜道を急いだ。

河原に出た。夜暗のなかに、あちこちで火光信号が点滅する。敵の部隊が互に連絡をとりあつてゐるのである。

大隊に復帰したのは、午前四時頃であつた。

引地部隊長、副官の池田中尉に報告する。

「よし、すぐ出発！」部隊長の眉があがつた。

直ちに、命令が各中隊に下達される。曉暗のなかで、出発準備が初まる。

私は副官に抗議した。私と同行した兵たちは、昨日の夕方焼き芋一つ食つただけで、何十キロの峻険を夜通し歩いて来た。せめて食事と仮眠の時間を与えてもらいたい。

池田副官は、大阪弁で氣さくに応じた。

「よしよし、お前らは午前六時の出発や。あとから、三中隊に追及せい！」

三中隊に構つた。

川本中隊長は既に武装して立つていた。

「足立曹長、ご苦労！」

大声でねぎらつてくれた。直ぐ当番を呼んで食事の支度を命じてくれた。やはり、うちの中隊はちがう。

つない。

中隊がコブに取りつくや、いきなり右側の敵陣から、一抱えもある大石が落下して来た。五、六個続け様に落下した。第一樓門に向つて、後方の友軍から重機や山砲の援護射撃があるが、何分にも石作りである。全く効果がない。

ここでは名古屋の小木曾君が負傷し、あつと云う間に第一小隊長始め数人がやられた。前に出た擲弾筒分隊からも負傷者が出た。

これではどう仕様もない。焦り焦りして来た。後ろから副官の池田中尉が匍匐して来た。おい、どうなんや、と云つて眼鏡を眼にあてたが、これは殿しい、部隊長は何してゐるか後方を振り返つた瞬間、敵弾が背筋へ来た。姿勢が高くなつたのであろうか。

十一時、後方から命令が届いた。

「山砲弾あと三発。膚接して突撃せよ！」

川本中隊長は突撃準備を命令し、抜刀した。

中隊全員、その場に背囊を置き、着剣した。剣尖がきらりと秋の陽に光る。

指揮班、第一小隊は左より、第二、第三小隊は右より突撃。

伝令が各小隊に下達して廻る。

日は中天に近い。あと四、五十分足らずで、正午ではな

外はまだ暗い。装具の触れあう音、整列する軍靴の響き、底力のこもつた号令……それらの入り交じつた音を夢うつつに聞いて、私たちは泥のように眠りこけた。

私たちは、きつち午前六時に出発した。馬鞍山までは三時間の距離である。

到着して見ると、成る程馬鞍山は馬の鞍のごとき山容である。標高八百米。澄みきつた秋天の下に、重畳した尾根が屹立している。

大隊は展開を終つた。

第二中隊は右、第四中隊は左。そして第三中隊は正面。

(第一中隊は呂果に残つた)

これはえらいぞ山頂を攻撃するのは三中隊ではないか。

これは相当な激戦になるぞと、私は唸つた。

午前九時、敵との至近距離にある山裾の「コブ」に取りつた。敵前二百米である。

中国軍の陣地は山頂にある。周囲は絶壁に近く、とても寄り付きようのない岩場である。正面に廟のような石作りの樓門があつて、左右が陣地になつてゐる。これが第一樓門。その上に第二、第三樓門があつて山頂の陣地と連続してゐる。

しかも中隊の位置から第一樓門に至る石段は傾斜角六十度位で、巾一米。道の両側は絶壁の断崖。遮蔽物は何ひとつない。

いか。旅団命令は「午前中ニ攻略出来ザル時ハ、次期作戰ノ為ニ転進シ」とあつた筈。突撃して一撃に攻略しなくとも、正午までこの位置で辛棒できないのか。

しかし、これが命令というものである。部隊命令は下達されたのである。敵の射撃は、ますます激しくなる。

山砲の支援射撃が起つた。

黒い直線が宙空を走つて、第一樓門の門扉に命中。続いて一発、また一発……。砲弾は正確に門扉に命中して爆煙を吹きあげる。半壊。——いまだ！

軍刀一閃、中隊長は真っ先きにとび出した。

私は岩場を蹴つて走つた。足下に小銃弾が炸裂する。耳もとに風が鳴る。

第一樓門に着いた。皆、肩で激しい呼吸をしている。

続いて、頭上の第二樓門に向う。ここは傾斜角七十度である。

戸谷指揮班長を人梯子に、その肩を踏んで中隊長、私、田口兵長、吉田兵長の順に登つた。

夢中で第二樓門に達し、門扉を引きあげた。

とたんに第三樓門から突風のような集射撃を受けた。大石が地響きを立てて落下して来る。

——ええい、この野郎、どうするか見ろ！

私は鉄帽の盾をぐつと引いて、戸谷を見た。

「戸谷班長、行こうか！」

戸谷が首肯く。

私は飛び出した。ヤケクソである。戸谷があとに続く。飛び出したとき、集中射撃が来た。戸谷が倒れた。左腕をやられている。私は立ったまま、岩壁に張りついた。

砂煙りをあげて、大石が降って来る。手榴弾が何発か、渦巻くように落下する。私は砂塵と炸裂の閃光に囲まれて身動きも出来ない。続いて左の陣地から瞰射して来る。もういかん！

戸谷は足許に躓んでいる。足と臀部から出血している。軍袴に、見る見る血潮の輪が広がって行く。

「おい、しっかりせえ。死ぬな。」

大きな戸谷を抱いて、十米程すり落ちた。岩壁のわずかな隙みに二人でとびこんだ。素早く戸谷の手当てをして、再びとび出した。頭上を中隊長が突撃して行く。続く中隊長がバタバタと倒れる。

第三機門まで、あと一息だ。機銃弾が集中する。

あっ、中隊長が倒れた。すぐに後ろから引地部隊長の命令が来た。中隊長に代って、第三中隊を指揮せよ。私はうなずいた。

——三中隊の指揮は、足立曹長がとるぞ！

吹鳴ったとき、膝がガクガクと震えた。すぐ隊長殿を収

容しなければ……。よし、煙幕を張って収容しよう。

発煙筒を投げあげた。直ぐ投げ返して来る。赤筒を投げたが、これも投げ返される。

中隊長に近づくことが出来ない。万一、敵手に落ちたらどうするか。気は焦るが、どうすることも出来ない。

決死隊を編成した。私が指名した。

類家上等兵、伊藤一二上等兵など五名である。後事は先任の精練軍曹に頼んだ。

私を先頭に、五名の兵を一本の縄で結んだ。私が縄をぐいと一度引けば突撃準備、ぐい、ぐいと二度引けば全員突撃して第三機門に突っこむ。

空を仰いだ。秋の落日は黄金色に輝き、墨絵のような尾根の連なりは悠久の歴史を蔵している。ああ、泰造がこの風景の下に死ぬのを、故郷の母は知るや知らずや。

——行くぞ！

私は縄の先端を握り、そろそろと這い登った。敵の瞰射が続く。私は岩角を利用して前進した。

突如、眼の前が光って、何もかも見えなくなった。眉間をやられた。あとのことは知らない。

気がついた時、ガーゼを山のように頼に乗せられ、顔中を糊帯されていた。私を呼ぶ戦友の声が周りに聞こえるが不思議に痛みは感じない。

一しきり、重機、軽機の掃射が響いて、戦闘は終わったようである。

日はとっぷりと暮れた。山上で篝火を焚いた。

隊長殿のご遺体の収容は無事に終わったようである。

「今日は、朝からよく頑張ったナ」

部隊長殿がねぎらってくれる。

「隊長殿は、どこにおられますか？」

私はご遺体の位置を聞いた。誰かに手を取られて、中隊長の前に立った。

涙が溢れた。

深々と拳先の敬礼をした。

その夜、にわか盲の私は部隊長の馬に乗せてもらい、三中隊の山中高光上等兵に手綱を引いてもらって下山した。

馬鞍山で負傷された池田副官殿は、私とおなじ済南の陸軍病院に入院し、亡くなられた。そして私のまわりにいた多くの戦友も殆んど沖繩本島の激戦で戦死してしまった。あの秋天を離して聳え立つ馬鞍山の姿だけは、いまでも私の記憶の底にありありと生きている。

黄塵と卵

水野史朗

(1)

私の入営は、昭和十五年十二月一日。名古屋の、中部第二部隊であった。

もともと、第二部隊の管門をくぐったのは兵器、被服を受領に行った時だけで、初年兵二百八十名は駅前の旅館に分宿し、四日後に中国へ出発した。

シナ事変は、四年目である。蘆溝橋に起った日中両軍の衝突は、次第に中国全土に戦火を駆け、四年目を迎えて長期戦の様相を帯びて来た。私達の入営は、そのまま戦地への出征であった。

十二月四日、駅前の南広場で、わずかな時間、面会が許された。最後の面会である。

父が来るか母が来るか、それとも両親に兄達が付き添って来てくれるか。私の心は躍っていた。算え年の二十一才、まだ少年期を抜けていないのである。

広場は、入営兵と見送りの群衆で一杯になった。戦友達はあちこちで家族に囲まれ、最後の別離を惜しんでいる。

愛国婦人会員の白い襟が、その間にちらちら見える。お茶の接待をしているのであろう。冬空は明るく晴れて風はない。

「遅いな、来てくれるかな？ 面会時刻をまちがえたのではあるまいか。」

首筋を伸ばして見廻した。父は七十才、母は六十七才、ともに老人である。私は両親の晩年の子で、五人兄弟の末っ子。年寄った両親が小牧から乗り物で来ることは、もしかすると無理かも知れない。

しかし、味練が残った。もう一度、あたりを見廻した時名前を呼ばれた。

「史朗よ」

はっとした。兄の声である。兄に手を引かれて母が来た。母の髪は真っ白、腰は弱んでいる。入営して僅か四目であるのに、十年も会わなかったような気がした。おっかさんと飛びつきたいが、私は軍人である。女らしい態度はとれない。きちんと、覚えばかりの敬礼をして、不動の姿勢をとった。何か云うと、涙になりそうなので、必死にこらえた。

面会中にも、上官が絶えず傍を往來する。ただ、母や兄と顔を見合わせて、数語を交わすだけである。母は口ごもったまま、私を見上げた。

「出征兵士を送る歌」の旋律である。

東邦商業学校生徒隊のバンドが、高らかに奏樂するなかに列車は大阪へ向けて出発した。

大阪港からバイカル丸に乗船、門司港外で一夜停泊し、朝鮮海峡を航行した。

海は鉛色に沈んで、ゆったりとうねっている。北上するにつれて、白い波頭が舷側に寄せるようになり、その中、激しいローリングとピッチングが襲って来た。

船首が空中に向かってぐーんと持ちあがるかと思えば、今度は逆に船尾が持ちあがって、スクリューがガラガラと空転する。始めて乗った輸送船である。今にも難波するのではないかと気がもめた。

輸送船の船室は天井が低い。頭を上げると、ぶつかってしまう。何しろ狭い船倉に三百人近い人間が群れているのである。怒り船酔いが出る。汚物がその辺に散らばる。人いきれと汚物と悪臭で、船内はむんむんして来る。

分隊の食事は最初交代制であったが、全員船酔いを発して、誰も取りに行く者がいない。第一、食事をする者がいないのである。数日間航行して漸く入港、上陸して青島の街を見た。始めて見る異邦の街である。しかし、全員、しゅんとして氣勢が上らない。みんな、酔ってふらふらしているのだ。陸へ上ったのに、地面がまだ揺れている。胸がむ

一装ではあるがダブダブの軍服に外套、巻脚絆も板に着かない私の軍装を、母はどう思ったことだろう。私は母に一言だけ云った。

「おっかさん、行って来るでナ」

万感の思いをこめた。うんと、母は大きく首肯した。

「兄ちゃん、親父とおっかさんを頼むよ」

これも元氣よく云った。兄は、家のことは心配するな、田や畑はおれ達が守って行くので、お前はお国のためにしっかりご奉公するのだぞと云って、親父もそう云っていたと付け加えた。母が私の耳に唇を寄せた。

「史朗よまめで帰れや。オレはお前にかかりたいでナ」

私は顔がクシャクシャに歪みそうだった。

ブラスバンドの奏樂が起った。

出発である。二人は背を見せて、群衆の中へ入っていった。一瞬、涙で何もかも隠んだ。号令があった。私たちは又銃を解いて整列した。列車は既に到着している。一個班七十名、四班二百八十名は、先頭の班から逐次乗車する。引卒班長は中川長三郎伍長。

ホームに歡送の群衆が溢れた。日の丸の小旗を振って万歳を連呼している。

私達も手を振って答えた。

「わが大君に召されたる 生命榮えある朝ぼらけ……」

かついてならない。

苦力が碧い空の下の舗道を、一輛車に石炭を満載して、のんびりと押して行く。ぎい、ぎいと軋む音と、腰で調子をとって押して行く姿だけが印象に残った。あとは何も覚えていない。

青島からまた列車。ながい旅である。曠野は蕭条として冬の風景。

葉の散りつくした揚柳、すがれた葉の樹がうしろえ流れて行く。開封に着いて、漸く船酔いが消えた。今度こそ本物の入営である。

(2)

中国河南省開封、橋場部隊教育隊――。

私達初年兵はここへ入隊した。

鈴木義正君、吉田広繁君も一緒である。その頃、一中隊は開封、二中隊は開封、三中隊は野雞崗、四中隊は陽城に分駐していた。私達は開封城外の教育隊で一期の教育(三ヶ月)を受け、更に特業教育(三ヶ月)を受けて中隊に配属されることになっていた。

寒い。いや、痛い。痛くてしびれる。ここは真冬は、気温零下二十二度五分。小牧の冬など、冬の中に入らない。曠野は満目荒涼。凜しい朔風は凍土の上に吹き荒れて、枯れ木に止った鴉がころりと落ちて来る。洗濯の水は洗う端

から薄水が張って、洗った靴下は忽ちパリンパリンの板となる。これはえらい所へ来たと思つて玉はちかむばかり。ところが、寒気など突は序の口であったのだ。

教練は歩兵操典第一章、不動の姿勢に始つて、右向け左向け、駆け足進め。射撃に行軍銃剣術。鍛うの鍛わないの段ではなく、毎日眼が覆むまで曠野を走りまわつた。その上、小銃の引き鉄をひく要領は「暗夜に霧の降ることく」と文学的表現で指導され、何が何だか分からぬまま「カッチン」と引けば馬鹿々と頭をどやされる。匍匐して前方を見る時は、鉄帽の箱を下げて眼を上げよと教えられ、眼を白黒させるうちに、阿呆ッノドカンとどやされた。何をやってもどやされる。

ふらふらになつて内務班に帰れば、

「水野ッ、巻脚絆を廊下で解くな」

「水野ッ、器具の置き方不良ッ」

「水野ッ、使役に出よ」

「水野ッ、飯上げ整列ッ」

「水野ッ、ここさ来ウ」

みんな自分が呼ばれているように聞こえる。耳は鳴り、眼は定まらぬ。威勢のいい古兵隊は早くもパチパチとビントを取つて廻る。いや、その賑やかなこと。職友、えらいことなつたなあと思つて見ると、これも煤けてまっ黒な顔

である。

春は、華北の曠野に黄塵が舞う。

前進、突撃、前進、突撃と反覆するうち、地平線にぼつかり黄色い半円の輪が浮かぶ。見る間に、黄色い輪は爛々と膨れあがり、あつと云う間に天際には立ちはだかり、烈風に煽られて私達を襲つて来る。ゴビの沙漠から吹きつけた季節風が黄土層の砂塵をまきあげ、高々と天空に舞い立ちながら、猛烈なスピードで追つて来るのだ。

「演習やめ、掃管準備」

汗びっしょりで草原を匍匐する初年兵は、一斉に防塵眼鏡を装着し、四列側面縦隊で走る。黄塵は濛々と後方から追つて来る。

数百米の高さに舞い立った砂の粒は、渦まき、舞き、太陽を遮り、樹の葉も小石も、路傍一面の浮遊物さえ天空にかつさらい、轟々と唸りをあげて通過して行く。

耳も鼻も唇も、一瞬の中にもまっ黒に閉ざされ、防塵眼鏡の内側には、気味わるい砂粒が込み透る。いかめしい教官殿も、助手どもも、顔は真っ黒煤け放題、眼鏡の奥に眼玉ばかりが光つていて、これが軍隊でなければ、笑い転げたいような面相。

こんな日は、兵舎に帰つてからが大変である。内務班の廊下、床、銃架、整理棚、薬布団、ありとあらゆる所に黄

色い塵煙はびっしりと積もつて、その厚みがなんと一握。この日の日夕点呼は、古兵隊の焦ら焦らが一段と嵩じ、あちこちの内務班で、パチの音が牙えわたる。

「ミンミン蟬」に「谷渡り」、「自転車競走」に「擗け銃」。珍芸が出るのはこんな夜である。剣吊りボタンに洗った矢（銃腔掃除の真鍮棒）を下げて、「水野二等兵は本日附けをもつて、洗ひ矢見習士官を命ぜられました」と、各班を申告してまわる。母が見たら胆をつぶすであらう。

夏は、千里の草原に大旋風が立つ。真っ黒な塵煙の柱が積乱雲を突きあげ、まるで巨大な龍が火を吐きながら天空に駆け登る景観。男性的である。胸がすかすかとする。しかし真夏の酷暑は四十度をこえるのだ。その炎天下に巻線機を背合ひ、秀げた砂山を上下するのは死ぬよりつらい。

極寒、酷暑、生きていくことさえ忘れる猛訓練を重ねる中、不思議に、五尺五寸の体軀は陸々とひき緊まつて、雨にも風にも、弾丸にも負けない精神な面魂となつた。

入營以来、僅かに七ヶ月である。

一期の検閲、有線の特集教育を終つて、野雞崗の第三中隊本部に帰る頃には、初年兵時代は夢のようで、列車の硝子窓に写る自分の顔を見て、ああ、おれもかわつたなあと思つて涙を流した。

この年十二月、小竹隊（三中隊）は山東省桓台县張店に

移駐した。貨物列車で移動中大東亜戦争の開戦をきいた。十二月一日付で上等兵になつていた。

(3)

昭和十七年一月、新任の中隊長松見巳之吉中尉の伝令兵を命じられた。伝令兵は当番兵を兼ねるのである。

西山准尉に命令されて、私は一驚した。

「准尉殿、自分は鈍であります」

准尉殿は、ニヤリと笑つた。

「鈍でよし、誠心誠意でやれ」

「イエ、自分は気がききません」

「気がきかぬ方がええ。誠心誠意でやれ」

とりつく島がない。困つた。松見中尉殿は名にし負う厳格な武人として、部隊中に名を知られた人である。また、要領や不正を最も嫌われる人柄でもある。私は、真剣に一晚中悩んだ。

悩んだ末に結論に到達した。

隊長殿とて、所詮人ではないか。誠意が通ずれば、道も開けるであらう。まして当番兵は人もやること、人に出ることが、自分に出来ない筈がない。故郷の母が寺参りの時、私に云つてきかせた言葉がある。

——この世のことは、この世で収まる。

そうだ。准尉殿の云う通り、誠心誠意でやってみるか。やる以上はトコトンやろう、完璧な当番になるぞ、と決心した。

大隊も、橋場部隊から引地部隊になった。

一月の末十号作戦（魯中作戦）が始った。初陣である。私は指揮班に配属された。片時も隊長殿の傍を離れなかつた。弾丸が来たら身代りになる決心である。私の決心はいつも立派なのだ。

この作戦中、初めて民家に入った。私は真新しいアンペフを手に入れ、床に十分粟殻を敷きつめ、その上にアンペフを敷いてまずは隊長殿のために最上の寝床を作った。こうすれば、のみやシラミが寄りつかないのである。そして私は土間一面に粟殻を敷き、その上に軀を横たえた。ここまでは上々である。

隊長殿は、即製のベッドですやすやす寝ておられる。有難いことに、当番兵には不寝番がない。よおし、明日の戦闘のために十分寝てやるか。心配していた当番も、誠心誠意でやれば大したことはない。やっぱりおっかさんの云う通り、この世のことはこの世で収まる……。大の字になって鼻をかいた。緊張がほどけたのである。

「おい、おい」
頭の上で声がある。敵襲？ 我破とはね起きた。銃声は

きこえない。出発がかかったのか？ 耳を澄ますがその気配もない。はて今の声は夢であったか、寝ようとして、はっとした。

隊長殿が起きておられる。

「あの……何か？」

ときくと、

「水野上等兵、お前の寝言はくどいなあ」

そのまま、ごろりと横になられた。

しまった。ああ、恥ずかしい。「くどいなあ」という今の一言、すい分突感がこもっていた。私が同じ寝言を長いこと繰り返すので、隊長殿は遂に寝つかれなかったのである。申訳ない。間もなく、部落の雞が鳴き出した。

今日は西、明日は東と敵を追って進んだ。

二月六日一五時、前方の山合いから集中射撃を受けた。弾着は正確である。先行した後藤小隊は釘付けにされる。後方の部隊本部からは頻りに状況知らせと伝令が来る。この日も、松見中隊は尖兵中隊であった。

「指揮班来い」

松見中隊長は真っ先に飛び出した。指揮班員は遅れじとあとに続く。

尖兵小隊を追跡して、水りついた小川を登って行った。

二百米も前進した時、岩影に倒れている兵隊を発見した。私にとっては無二の戦友、増田治男上等兵である。駆けよって抱きおこした。血に染まっている。

「増田、しっかりせい、水野だ」

私は増田を抱きしめて、揺すぶった。その中、眸を見開いた。

「……水野、やられた」

刃りはもう薄暗くなっていた。前方の山壁の残雪が、くつきりと白く浮きあがった。

全員で増田上等兵を助まし、大谷衛生兵に頼んでまた進んだ。

「敵の左へまわれ」

中隊長は小声で命令して、山脚の急坂を登る。私は直後にびったり附いて進んだ。

山肌は硬い岩に覆われて、足をかけるとザラザラした砂が零れ落ちて来る。銃剣を、岩肌に突き刺して攀登した。既に、まっ暗である。頭上に、尾根の稜線が黒々と見えて来た。八合目である。

中隊長の歩みがびたりと止まる。戸谷班長の影が音もなく滑って、隊長殿の傍へ寄り添う。隊長殿は何か囁いてい

る。
戸谷班長以下三名が坂を這うようにして登りはじめた。

途中で、三名が三方向に別れる。私は伏せたまま、前方に眼を凝らした。

五十米程の距離を置いて、黒い人影がぼつんと立っている。腕に銃をのせ、右に左に動きながら警戒している。中国兵の歩哨である。

指揮班の三名は、ちりちりと地を這って進んで行く。

私達は敵兵に照準した。

突如、戸谷班長が起ちあがった。

「誰呀」(誰か)

鋭い声が出て、敵兵が銃を構えた。同時に他の二人が躍りかかった。無言のまま、敵兵を逮捕した。

捕虜は班員を付けて後方へ送り、私達は戸谷班長を先頭に敵中に入った。暗夜のため、戸谷軍曹、隊長殿、私達の順で一本のロープを腰に結わえて行動した。

先頭が前進すれば、私達も前進する。停止すれば、一同停止する。声は立てられない。足音も立てられない。前進停止を何十回も繰り返して闇のなかを眺方まで偵察した。時には、敵軍の壕に接近して中を窺った。

大胆な偵察である。

朝、元の位置に戻って、大隊本部に敵状況を報告した。

直ちに攻撃が初まり、松見隊は突入した。

敵の部隊は、既に移動した後であった。

山合いの大きな部落であった。古い貨幣が、あちこちに散乱していた。

その夜、増田君を茶毘に附し部落の廟の庭に埋葬した。

この頃、ある宿營地で、雞卵を穴山手に入れた。これは有難い、久しぶりに玉子焼きを拵えて、隊長殿を喜ばそうと思った。

しかし、困ったことに玉子の入れ物が無い。まさか、戦鬨中この壊れやすいものを袋に入れて、腰に下げるわけにも行かないし、日の丸の旗に包むことも出来まい。

玉子は十三個である。背囊に入れれば、行軍の衝動で割れてしまふし、ここに棄て去るのは如何にも残念。そこでそっと鉄帽の中に収めて、首の後ろに引っかけ、背囊の上に載せて歩いた。これなら、右肩に置いた小銃も触れないし、安定をとって行軍すれば割れることもない。

その中、敵に遭遇した。ピューン、パシッと弾丸が飛んで来て附近に突き刺さる。

これはいかん。銃を地面に置いて、まず鉄帽の紐を悠っくりと外した。それから、鉄帽をそろそろ前に廻し、そっと地上に置いて、その横に伏せた。指揮班は、もう散開している。

敵は前方の茂みから盛に射って来る。私も十発ばかり射

った。当らない。玉子が気になったからであろう。

弾丸はピュン、ピュン来て土煙りをあげる。

その時、後方で声がした。

「おい、指揮班で、鉄帽をかぶらない奴がおるぞ、早くかぶれ！」

三小隊の少尉さんの声だ。うるさいナ。手前さえかぶってりや、人の世話まで焼くこたあないじやないか。澄まして射っていると、

「こら、水野上等兵、早くかぶれ！」

今度は名指しである。こっちは、かぶれない事情があるんだ。煩く云々とウシロ弾丸を飛ばすぞ。

戸谷班長が私を見た。

「水野ッ、かぶれ！」

仕様が無い。命令である。けれど、玉子はなんとかしなければならぬ。

鉄帽の玉子を、一つづつ小銃の脇に並べた。そして鉄帽を略帽の上にかぶった。それから水筒を取り出して水を棄て、玉子を割って水筒の口へ入れた。所が、中国の玉子は黄味が丸くて固いし、水筒の口より大きいのである。

弾丸は来る。気はせく。汗はすたすた落ちて来る。漸く三個ほど押しこむと、次のは手許が滑って失敗した。慌てて、唇をつけて吸ってしまった。隊長殿、ごめんさい。

八つか九つを、無理やり水筒に押しこんだ。

はっと気がついた。中隊はもう、前進してしまつたではないか。慌てて、銃を握んでとび上った。二百米程前方で中隊は砂塵を蹴立てて走っている。

残りの玉子は、えいと踏みつぶして走った。

日が暮れて宿營地に入った。水筒に玉子を収めたのは、我ながら名案であった。焚き火で埋み火を作り、飯盒の蓋に牛脂を引いて、玉子焼きを作ろうとした。水筒の栓を外して、じゅーッと焼けて来た飯盒の蓋に水筒の口をかざした。何も出て来ない。オヤ、おかしい。水筒の尻を叩いたが、やはり出て来ない。玉子の白味でも出て来そうなものである。が、いくら叩いても出て来ない。どうしたのか。阿呆のようなが、水筒の口を眼にあててのぞいて見た。何も見えない。

玉子は、私の体温で急速に固まり、水筒の内部に張りついて、蒸発したのであろう。

黄塵と玉子の記憶、これは三十年経過したいまも消えない。そして私達と北支で別れ、沖繩に転戦して行った戦友達を思うとき、私の胸は傷むのである。

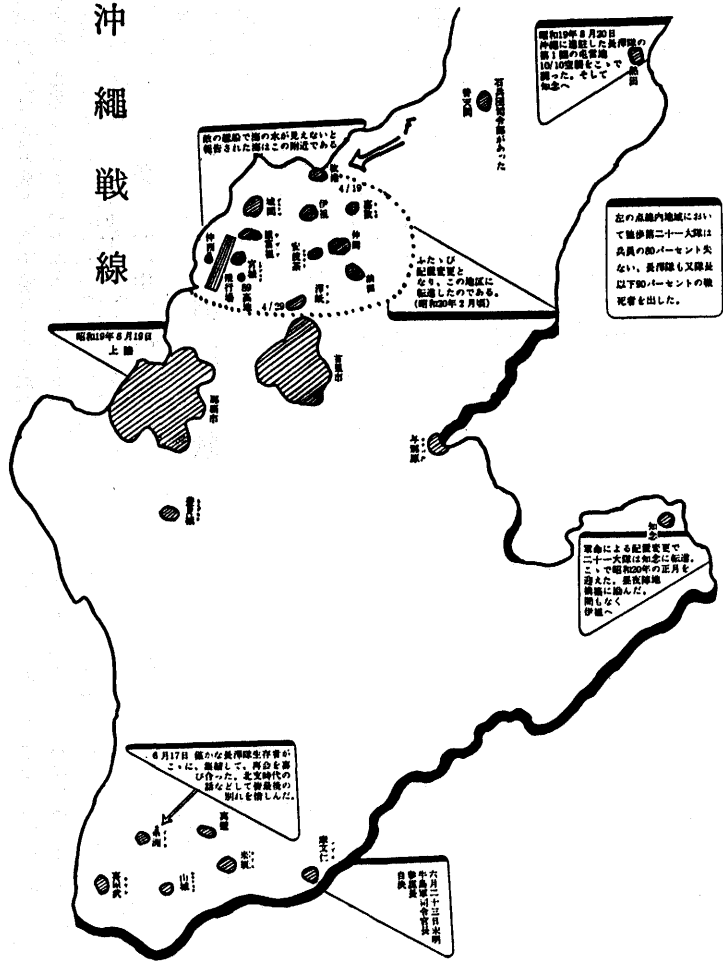
華北戦線の日中両軍戦力について

華北戦線における日本軍、中国軍の兵力は、昭和十四年（一九三九年）二月、独立歩兵第二十一大隊編成の当時は、日本軍約十萬（三個師四旅）、中国軍約三十七萬であった。（国府軍二十五萬、中共軍十二萬）しかし、国府軍には保安隊、游撃隊等の不正規軍があり、中共軍も同様に自衛隊、游撃隊を編成していたので、これを正規軍に合算すると六十萬に近い兵力となり、北支派遣軍は六倍の敵に囲まれて警備討伐の「治安戦」を戦ったことになる。それは果てしない大陸の中の点と線を、面に拡大して行く戦闘であったが、戦線も年を追って次第に拡大し、昭和十七年九月には日本軍約三十萬、中国軍約百三十五萬の兵力比となった。（不正規軍を含む）

大隊は当面する中共軍、国府軍を追って、山東河北両省にまたがる山嶽地帯に、山西省の雲際立つ太行山脈中にまたはる波うつ河南省の太平洋原に猛烈果敢な討伐戦を展開したが、当時両軍の兵力比は一对四、五である。大隊の敵は常に五倍乃至十倍以上であった。

次頁に昭和十七年当時の、日中両軍の兵力比較表をかか

沖繩戦線



北支方面日中両軍兵力比較表

(昭・一七年九月)

日本軍

中国軍

○北支方面軍司令部(岡村寧次大將)
 方面直轄兵団(第二十七師団、第三十五師団、第一百十師団、独混第一旅団、独混第七旅団、独混第八旅団、独混第十五旅団)

- 第一軍司令部(岩松義雄中将)
 - 第三十六師団(井関 仰中将)
 - 第三十七師団(長野祐一 郎中将)
 - 第四十一師団(清水規矩中将)
 - 独立混成第三旅団(毛利末広中将)
 - 独立混成第四旅団(森田英武中将)
 - 独立混成第九旅団(池ノ上實吉中将)
 - 独立混成第十六旅団(若松平治中将)
 - 第十二軍司令部(土橋 一次中将)
 - 第二十一師団(田中久一 中将)
 - 第三十二師団(井出鉄蔵中将)
 - 独立混成第五旅団(内田銀之助少将)
 - 独立混成第六旅団(榊井虎次郎少将)
 - 独立混成第十旅団(河田雄太郎少将)
 - 駐蹕軍司令部(甘粕重太郎中将)
 - 第二十六師団、騎兵集團、独立混成第二旅団
- △約三十一万▽

○北支將承軍(保安隊、游撃隊を除く)
 第一戰区(司令 蔣鼎文) 三十万
 第二戰区(司令 關錫山) 五万
 第八戰区(司令 朱紹良) 一八万
 第十戰区(直轄 蔣介石) 二十一万
 冀察戰区(司令 蔣鼎文) 三万
 魯蘇戰区(司令 于学忠) 五万

△計約八十二万▽
 ○北支方面共産軍(地方游撃隊、自衛隊を除く)
 劉伯承集團(新編 1・2・3・4・7・8・9・10・11
 12師) 四万
 孫秉璋集團(冀中、冀察軍区) 三万五千
 徐向前集團(百一五師、山東統隊) 四万五千
 晉綏陝甘寧集團(陝甘寧軍区) 六万
 陳毅集團(1・2・3・4・5・6・7師) 四万

△計二十二万▽

戦史叢書「北支の治安戦」(2)より

タリ。我ハ水陸両用戦車ヲ含ムM4戦車約四〇輛ヲ撃破シ
重機、迫撃砲等多数ノ戦利品ヲ挙げタルモ約七〇〇名ノ戦
死者ヲ出シタリ。

四月二十七日、大隊ハ生存者ヲ統合シ、宮城第五十九高
地ニ後退セリ。

四月二十九日、五十九高地ノ我ガ陣地ヲ発見セル敵ハ、
海、空、砲撃ヲ以テ一斉ニ攻撃ヲ加エ来リ、遂ニ我ガ陣
地ノ銃砲眼ヨリ砲弾突入スルニ至レリ。

敵ハ約一時間半ノ一斉射撃ノ後、白煙彈ヲ発射セリ。
敵愈々身近カニ迫ルヲ見ルヤ、大隊員ハ全員露出陣地ニ
出テ散見スル敵歩兵群ヲ射撃ス。就中、敵機ノ上空ヨリ
スル攻撃ハ激烈ヲ極メ、爆撃ニヨリ幾ルル者続出。敵モ亦
戦死者多数ヲ出シタルモノノ如ク、午前九時、一時攻撃ヲ
中止セリ。

十時、敵ハ攻撃ヲ再開、兵力ヲ増強シテ二方向ヨリ前進
シ来リ、無数ノ白煙彈ヲ射チ込ムト共ニ一挙、我ガ陣地ニ
突入セリ。

戦車砲弾ハ陣地内ニ炸烈シ、此ノ戦車群ニ対スル我ガ肉
迫攻撃ハ奏効セズ。徒ラニ尊キ犠牲者ヲ増スバカリナリ。
加エテ東部陣地入口ヨリ敵ハ火焰放射ヲ行イタル為、陣
地内ハ熱氣、ガス充滿シ、焦熱地獄ヲ現出ス。
生存者ハ尚モ屈セズ西部入口ヨリ出撃シ、敵戦車ニ対ス

ル肉迫攻撃ヲ加エ四輛ヲ撃破セリ。

更に近接セル敵ハ我ガ陣地ニ馬乗り攻撃ヲ加エ、削岩機
ヲ以テ壕上カラ穴ヲ穿テ爆雷ヲ投下セリ。五十名ノ重症患
者ハ一時ニシテ玉碎ス。

戦闘ハ午後四時マデ継続、大隊本部及ビ配属工兵隊ノ大
部分ハ戦死セリ。

其ノ夜、生存者ノ殆ンドハ前面ノ敵ニ斬込ミヲ敢行、附
近陣地ニアリシ第二、第三中隊、機関銃中隊ノ一部モ当日
屋間ノ戦闘ニ協力シ、夜間斬込ミニ出撃セリ。此ノ斬込ミ
ニ於テ敵ノ重機、軽機、迫撃砲、自動小銃等多数ノ戦利品
ヲ挙げ、敵ニ甚大ナル死傷ヲ与エタルモ、事実上我ガ独立
歩兵第二十一大隊ハ当戦闘ニ於テ全滅セリ。

(防衛庁戦史室資料、及び大隊生存者の証言による)。
第三中隊の記録編集委員会)



天号作戦と長澤隊

(1)

九州と台湾の間に、点々と弓なりに連なる列島がある。
南西諸島である。これを日本列島のベンダント(下げ飾り
)と地理学者はいう。ベンダントの中央部の小さな眼らみ
が奄美大島。さらにその下の、瓢(ひさご)のような膨ら
みが沖縄本島である。

沖縄本島は、九州から海上二百杆、台湾からは二百二十
杆、昭和二十年の戦闘機では共に約二時間の飛行距離であ
る。島の面積は南北に百三十杆、東西の中はもっとも狭い
部分で二杆、亜熱帯の細長い孤島である。全島濃緑の樹林
に掩われているが、本島の北部は藪とした山嶽地帯であ
り、南部は首里、那覇を中心とする人口密集地帯。那覇に
隣接する泊港は、本土と南方諸地域を連結する中継点でも
あった。沖縄が日本領に編入されたのは明治四年(一八七
一年)であったが、それまでは舜天王より尚泰王に至る六
百七十九年間の独立王国である。明るい鮮明な空、紺青の

第三中隊の記録編集委員会

海、そして島を掩り緑の樹林は中世以降南海の蓬萊島と呼
ばれて来たが、昭和二十年三月二十六日朝、突如、慶良間
列島に米軍の砲火が轟いた。この日から六月二十三日に至
る百日間にわたり、大東亜戦争最後の激戦「天号作戦」が
戦われたのである。それは凄じい百日間であった。

本島防衛の第三十二軍二個師一旅は(十万人)軍司令官
牛島満中将以下殆んど全員が玉砕をとり、米軍八個師(十
八万三千人)は四万九千人が死傷した。沖縄の海上に集結し
たアメリカ艦隊は一千二十七隻に上り、一戦場における艦
隊集結の記録を世界戦史に刻んだ。日本軍の特攻機は、九
州、台湾より沖縄の米艦船部隊に殺到し十次にわたる「菊
水作戦」の特攻機は、実に二千三百九十四機にのぼった。
更に天号作戦には沖縄県民五十万人が協力し、その三十パ
ーセント、十五万人が戦火に露れた。島田県知事も、戦火
の中に住民と運命を共にしたのである。そして沖縄の作戦
は、戦史上の凡ゆるる問題を提起して終熄した。

米軍の予想外な急攻に苦慮した大本営は、昭和十九年三月南西諸島に四個師五旅の兵力配備を決定して第三十二軍を創設、急拠同年七月から八月にかけて展開を終了した。

(沖繩本島) 第九師団(武)、第二十四師団(山) 第六十二師団(石)、独立混成第四十四旅団(球) (宮古島) 第二十八師団(豊)、独立混成第五十九旅団(碧)、独立混成第六十旅団(駒) (石垣島) 独立混成第四十五旅団(球) (大東島) 歩兵第三十六聯隊(球) (奄美大島) 独立混成第六十四旅団(球)

この年七月の八日、第六十二師団(石兵団)は三ヶ月にわたる大陸打通作戦(河南作戦)の遂行中であり、重慶第一戦区軍を急追して霸王城、洛陽を抜き盧氏に突入中であつたが、軍命によって反転、強行軍をもって開封に復帰し、大隊は小宋鎮(開封西北)に分駐した。七月二十二日、第三中隊はこの部落のアンペラ敷きの民家で、師団改編の発令に接したのである。

中隊の人事係は、分宿した民家を廻って遂次中隊員を呼び出して行った。指名を受けた者は某方面へ(沖繩)、然らざる者は他隊へ転属して行くのである。薄暗い民家の軒を出て、隊員は各自兵器と装具をもち、華北の瑰麗たる太陽の下に、右と左に別れていった。呆っ気ない戦友同志の別離ではある。入営以来幾年間、鉄道警備に八路軍討伐に

馬鞍山に太行山脈に、霸王城、黃崗店、洛陽、盧氏に常に生死苦楽を共にした戦友といふ、一言の挨拶もなく別れて行くのである。

七月二十三日、長澤文雄中尉が第三中隊長に補せられ、ここに長澤隊が誕生する。

新編成の中隊は三個小隊二百名。将校下士官兵は、いずれも華北歴戦の強者である。兵員は昭和十五年より十八年徴集兵をもって構成され、それに十九年の補充兵を加えた。出身地は愛知県、岐阜県、三重県を主体とする。慌しい編成替えであつた。中隊生存者、吉田弘繁伍長の記憶を引く。

——小宋鎮で全員遺書をかき、爪と髪をきって郷里に送りました。最後の小包みでした。

九月二十四日大隊は貨車輸送により河南省開封を出発、徐州、南京を経て北呉相に到着。乗船準備に入る。中隊員はここで始めて新中隊長の風貌に接する。

——兵隊を愛せよ。

これが各小隊長、下士官へのきっぱりとした第一声であつた。八月十六日、長澤隊は他中隊とともに輸送船和浦丸以下三艘に乗船、駆逐艦の船団護衛を受けて対潜警戒に当りながら群青の東シナ海を南行する。行先きは依然嚴重に港には輸送船が続々と入って来る。棧橋では大砲、自動車、軍需物資の梱包が続々とウインチで吊り下される。下船してくる兵隊の数も夥しい。揚陸を終って港外に出る船入ってくる船、その間をぬって海軍の汽艇が矢のように走りぬけて行く。紺青の海も陸も、全島が軍事一色に塗りつぶされて、湧き立つような活気——第九師団(武)、第二十四師団(山)、独混第四十四旅団(球)は既に上陸を完了、陣地構築に入っている。二十日朝、中隊は泊国民学校を出発、本島西海岸の牧瀨、北谷、喜舎場を行軍して夕刻泡瀬の熱田部落に入った。河南作戦以来の行軍である。一同沖繩特有の蒸熱に喘いだ。沿道の民は熱烈な歓迎をもって迎え、婦人会は湯茶の接待に立ち働いた。生存中隊員織田直澄兵長の述懐。

しかし船内の一室では各小隊長、古参下士官が中隊長を困み、真剣な表情で熱汗を拭いつつ、沖繩本島の地図をみつめていた。

八月十九日未明。船団は暁闇の濃い沖繩本島泊港に、白い夜光虫の尾を引いて入港した。低い丘陵の影は黒々とうねって北へ延び、那覇市は夜の静寂の底にあつた。武装を整えた中隊は、中隊長を先頭に黙々とタラップを踏んで下船。直ちに泊国民学校へ入る。中隊員が校舎の廊下に又銃練を組み装具を解き、汗ばんだ鉄帽を脱したとき、初めて夜は白々と明けた。教室の窓の向うに緑の樹林が浮き、赤い琉球瓦の屋根が見えて来た。その時、兵隊の唇からおつというどよめきが起つた。沖繩だ……。生存者佐橋鋭司上

等兵の言葉を引く。
——よし。今度はアメリカ兵が相手だな。おれ達は沖繩で死ぬんだと直感しました。

途中、小休止の時民家に入つて水を貰おうとしました。おばあさんが出て来て、兵隊サン、水ゼイタクデスヨと云うのです。思わず目をむくと、相手はニコニコして清水を水筒に入れてくれ、黒砂糖の塊までくれるのです。水がゼイタクだと云つたのは、水は沢山ありますよという意味だったのですね。沖繩の人は親切でした。

熱田部落(中頭郡美里村)。ここは平地と谷間の間。中城灣に臨む三十戸の小部落である。中隊は分隊毎に陣地構築に入った。珊瑚礁の岩盤は固い。十字嶽は火花を発し、

掌には血が滲んだが隊員の脳裏には、中隊長の一言が強く
沁みついていった。

——沖繩の戦いは抗道戦だぞ。

制海、制空権の期待できない戦況では、陣地（抗道）以外に射撃を避ける遮蔽物はない。抗道こそ生命なのである。サイパン島の水際陣地が不徹底であった戦訓を、各分隊長は長澤中隊長に教えられた。

北支では乾いた太陽が地平線の彼方煙霧の中から昇って沈んだ。沖繩の朱盆のような太陽は海から昇り、また海へ落ちる。環境は僅かの内に激変した。が、ここは何と云っても日本の中である。言葉は通じる。人情は細やかである。そして本土同様、公会堂もあれば銭湯もある。

十月十日早朝、突如アメリカ第五十八機動部隊（第五艦隊）は沖繩を急襲、那覇市を炎上した。青い星のマークを浮かせた艦載機群は美里村一帯にも投弾し、低空を旋回して地上を掃射した。中隊長は軽機小銃を掴んで壕外に走り出で、これに対空射撃を加えた。生存者佐藤宮雄伍長の記憶をひろう。

——この時は物凄く射ちました。中隊だけでも何機かに命中弾を与えました。大隊の撃墜機は二機ということですがもっと落していると思います。

比島の戦勢不振は台湾軍から兵力を抽出する結果を生み

台湾の補填は、沖繩軍から第九師団を転用することに決した。十二月七日、陣地変更下命。大隊は知念半島に移駐する。中隊の新陣地は半島突端、久手堅の西方にある無名部落である。道路を隔てた直下は切り立った断崖。

昭和二十年の正月はここで迎えた。毎日が岩盤への挑戦である。長澤隊は前年十月、十二月の二回沖繩の防衛召集兵百名を迎え、隊長以下三百名になっていた。

二月六日、ウルシー環礁を発した米機動部隊は硫黄島方面に向った。又もや状況急迫によって大隊の守備陣地が変更となる。中隊の今度の陣地は首里の北浦添村安波茶部落である。中隊長は哭いた。久手堅陣地は、中隊長の血と汗で掘った二重構造の防敵抗道であった。生命がけて掘ったこの中隊陣地を、上級司令部は又しても放棄せよというのか。そんな作戦を、一体誰が立てたのか。隊長は唇を噛んだ。その眸はいい知れぬ怒りを湛えていた。しかし、誰も一言の不平等を洩らさなかった。中隊長は潮騒の中に縦列を組み、銃と背囊を負って黙々と知念半島を北上して行った。

安波茶では断崖に横穴を掘った。分隊毎に必死の力をふり絞って掘った。二月十九日、ターナー中将麾下の海兵二個師団は硫黄島に上陸し、栗林兵団と激闘を繰りかえした。三月が来る。敵艦載機の空襲は頻度を加えて行くが中

隊は陣地構成に全力を傾注した。三月初旬、硫黄島は玉砕した。今や敵の来攻は必至である。昭和二十年三月二十五日甲号戦備下命。三月二十六日朝、春陽の下に伊祖高地の大隊本部監視哨は、座間見島に上陸する米軍を望見した。

安波茶の台上からも砲煙と上陸用舟艇が明瞭に望まれる。四月一日午前七時。牧湊の沖は米軍の艦艇で充滿し、嘉手納海岸に奔騰する射撃の塵煙は暫く宙空を掩った。上陸軍は戦車を先頭に無人の野を行くように続々と上陸。忽ち嘉手納海岸に橋頭堡を設けた。何故か、日本軍四百門の砲兵群は沈黙を守ったままである。

——射てッ、何故射たないのか。

米軍撃滅の好機は、整頓未成のいまではないか。中隊長以下、全員ぎりぎり奥歯を噛み、突包を装填して出撃命令を待った。しかし、命令は遂に来ない。砲兵は一発も射たない。果せるかな、上陸軍はこの日の中に本島の南北を両断して北、中飛行場を占領し、二個師団は北部へ、二個師団は怒濤のように南下を開始した。（陸軍第七師団、第九十六師団）中隊の守備線は城間、伊祖の線である。（安波茶は主陣地）そして牧湊橋畔には第一中隊（加藤隊）と共同して各一個分隊を置いていた。兵力上止むを得ない広域分散である。中隊長は安波茶駐屯以来連射砲部隊の配属を要請した。戦車を射つ大砲である。更に連射砲が無理な

ら高射砲をと懇請したが返事は来なかった。生存者井土邦一伍長の証言を引く。

——自分は大隊本部にいたので、隊長殿の要請をよく知っています。これは旅団、師団に上って更に上級司令部で断られたのだと思います。軽機で戦車が射てますか。肉弾でやれというのですか。戦後きけば、大砲は四百門もあったというぢやありませんか。

四月十二日、嘉数陣地の原大隊（独歩第十三大隊）は米第三八三大隊の急攻を受けたが、臼砲、迫撃砲部隊の猛射で之を退けた。（激戦三日後転進 砲をくれという中隊長の悲痛な要請は、遂に二十一大隊の上に結実しなかった。四月十八日夕刻、中隊長の手で牧湊の橋梁を爆破した。そして橋畔に野砲弾を埋設して地雷の代替とした。

四月十九日未明、凄じい砲撃が対岸から起った。何十噸という鉄量が閃光を引きつつ、伊祖高地に集中した。高地中隊の海軍砲台は一瞬にして消し飛び、高地の樹林も裂けて飛んだ。

集中射の止んだ直後、M4戦車は単縦列を組んで一気に川を押し渡った。随伴歩兵が火焰放射を反覆して前進して来る。砲閘を裂いて火焰が蛇のように躍る。分隊員は軽機擲弾筒をもって応戦し、或は破甲爆雷をもって突撃した。しかし圧倒的な火力の前に、それが何の役に立つであらう。

夜が明けた時、伊祖高地は赤裸の肌を露出し、海軍砲台の砲身は無惨に折れとび山脚から高地にかけて、戦死体は累々と重なり合っていた。牧濤から伊祖へ続く急坂を、敵兵は鮮きながら前進して来る。こうして、伊祖高地は占領された。敵の集中射撃が起った未明、台地下の大隊本部は安波茶部落に転進した。しかし、敵の攻撃が余りに迅速であった為、台地直下の横穴壕は敵中に孤立したのである。

伊祖高地を占領した米軍は、前日東海岸の渡口に上陸した米第二十七師団の第百五連隊である。(第百六連隊は嘉致を攻撃)生存者鈴木義正伍長の意見を誌す。

「この米軍の夜襲を、「滲透して来た」と書いた市販の戦記がある。滲透というのは、何もない所に入って来ることです。この夜襲は物凄い火力による強行突破です、しかも二十一大隊の戦友は全員肉迫攻撃に転じて戦死しているんです。言葉に拘泥するわけではないが、滲透というのは状況を知らない人の囁言です。それにしても戦車を射つ大砲がほしかった。

(3)

伊祖高地の奪換命令は午後六時長澤隊に下達された。

長澤隊は伊祖台地に馬乗り占領せる敵を攻撃。一挙に牧濤の河川以北に撃退すべく夜襲せよ。

第三小隊 東田少尉以下三十名

第一小隊は安波茶、伊祖間の稜線を前進して蘇鉄林の手前掘削り待期。第二小隊は安波茶陣地より伊祖部落南方の凹地を迂回して西方地点待期。第三小隊及指揮班は高地に連結する凹地を前進して、公会堂附近の広場で待期。各隊の攻撃発起は二十日午前二時。

一同、不動の姿勢で命令を胸に置んだ。

中隊長は夜光時計をちらと見て、時間を規正した。兵服のポケットから銀のシガレットケースを取り出して全員に廻した。恩賜の真である。

午後十時、各隊は陣地を出る。

敵の射出する照明弾は安波茶、伊祖間の稜線、窪地を隈なく照射した。

各隊照射時には匍匐に移り、切れ目を待って前進した。

第一小隊は掘削り附近において敵と接触して交戦し、全滅の悲運に際会した。(鈴木義正稿「伊祖夜襲前後」参照)第二小隊は伊祖高地南測を前進中、敵の歩兵と接触してこれも高地に至らずして全滅。

独り中央を前進した長澤中隊長直卒の指揮班第三小隊は午前二時高地の敵に突撃し、夜闇の中果敢な手榴弾戦を展開した。そして四時頃迄に敵に甚大な被害を与えたが、

中隊命令は伝令によって直ちに各小隊に伝えられた。四月十九日の暮靄は静かに安波茶部落を押し包んだ。各分隊の壕では、早くも夜襲の準備をすませた兵達が、分隊長を囲んで水杯の別杯を交わしている。華北戦場以来際戦の兵隊達である。どの顔にも特別悲壮な感概は浮かんでいない。

中隊長は川上小隊(第三小隊)の洞窟陣地に分隊長以上の中隊幹部を集めた。ここは伊祖と安波茶の中間にあり、目標の伊祖高地にはもともと近い陣地である。(二軒)薄暗い壕内には一本の裸蟬が明滅している。外では、轟々と米軍の砲撃が渦巻きかえしている。

「命令を伝える」

中隊長は一語一語を、明瞭に区切るようにして云う。

中隊は今夜十時伊祖高地に対して斬込みを敢行する。

第一小隊は右第一線、第二小隊は左第一線を攻撃、指揮班及び第三小隊は中隊長が率いる……。攻撃発起の時刻は午前二時。

続いて編成と攻撃方向が示される。

指揮班 長澤中隊長以下十五名

第一小隊 野畑少尉以下三十五名

第二小隊 城戸少尉以下三十名

この戦場において、長澤中隊長、野畑少尉、城戸少尉以下多数の犠牲者を出した。

東田少尉は指揮班、第三小隊の生存者を指揮して台上の敵を攻撃して駆逐し、長澤中隊長以下の遺体を埋葬した。

(織田直澄稿「伊祖四十八高地」参照)

敵は夜明けと共に攻撃を再興して来た。東田少尉は残兵を指揮して台地直下の大隊本部壕に拠り、これを拠点として交戦を継続したが敵は執拗に自動小銃、手榴弾、火焰放射機をもって壕口に近接し馬乗り攻撃を加えた。中隊員は手榴弾小銃によって応戦、二十二日夜独歩第十五大隊の急援を得て二十七日夜半漸く大隊本部壕を脱出し、屋富祖陣地に撤退した。夜襲当夜壕外で戦闘した中隊残存員は、木村曹長の指揮下に入って安波茶の指揮班壕に入った。(三十八名)続いて二十日正午、第三小隊陣地は米軍歩兵の近接攻撃を受けたが夕刻迄交戦して之を撃退した。伊祖夜襲の後、中隊員の一半は屋富祖、城間高地に転進して他部隊に合流し、連日米軍陣地に夜間斬込みを敢行したが、四月二十七日、城間陣地に戦車を伴う敵歩兵群の攻撃を受け同日午後四時頃全滅した。(井土宇吉伍長以下十名)一方指揮班壕を脱出した木村曹長以下十五名は、四月二十七日夜半宮城、仲西飛行場の中間に位置する米軍陣地に斬込みを敢行し、機関銃、自動小銃、無線機、彈薬等多数の戦利品

を獲得した。その後、中隊生存者は経塚西方第五十九高地の大隊本部壕に集結したが、四月二十九日敵戦車、歩兵群の攻撃を受け激烈なる肉迫攻撃と白兵戦を展開、殆んど全員玉砕を遂げた。(井土邦一稿「ああ五十九高地」参照)

五月一日、山内(井土邦一)伍長は一個分隊を指揮して仲西飛行場を攻撃した。

五月二日、中隊生存者の一半は安波茶、経塚間の凹地において敵歩兵群を攻撃、二十一大隊歩兵砲(桜田少尉指揮)の応援を得てこれに甚大な被害を与え、潰走せしめた。

(織田直澄兵長参加)五月四日以降、中隊生存員は澤岬において第二十三大隊に配属され夜間戦闘を継続したが五月中旬、首里防衛線を突破された日本軍は交戦しつつ、本島南部地区に撤退した。(須崎治良八稿「沖縄戦線五月中旬」参照)

雙方の軍民は折柄の豪雨泥濘の中を、砲撃、爆撃を避けつつ島尻地区に集結する。本島南端喜屋武岬の断崖に立てば、眼下は森々とした太平洋の水である。敵は摩文仁、米須、喜屋武の沖合いに数百の艦艇を運ね、艦砲の斉射は島尻一帯を爆煙で覆った。敗残の兵員、沖縄住民の死屍は、累々として亜熱帯の白日下に横たわった。

この敗軍のなかに如何なる因縁の糸が手繰られたのであろう。六月十七日午後、長澤隊十七名の生存者は糸須天然

洞窟において偶然に相会した。五体満足な者は一名としていない。何れも杖をつき、銃にすぎり、或は大地を這っていた。十七名は亡き中隊長の思い出を語り、北支の話をして、肩を抱きあつて別れたが、その夜半、前平の敵陣に長澤隊最後の斬込みを敢行して斃れた。

昭和二十年六月十七日のこの日、糸須天然壕の集結をもって、長澤隊は永遠に解散した。しかし、中隊生存員はその後も強烈な戦闘行動を捨てない。

彼らは沖縄戦の終戦を知らず、元より八月十五日の祖国降服を信ぜず、或は島尻の洞窟にひそみ、或は国頭の山中にひそんで、毎夜のごとく夜間斬込みに挺身して米軍の心胆を奪った。その戦闘行動は実に昭和二十年十一月まで継続されるのである。いま長澤隊の生存者は三百名中わずかに十人。その一人、伊藤久男兵長の言葉を最後に引く。

「隊長殿が生きておられたら、きっとこう云われると思います。」

「お前達、よくやってくれたナ。有難う。有難う」

伊祖四十八高地

織田直澄

昭和四十五年十二月十八日午前九時二十五分。私達を乗せた日航機は、沖縄へ向って羽田飛行場を離陸した。

私たちは長澤中隊長以下五柱の収骨と慰霊のため、沖縄本島伊祖高地へ行くのである。一行は中隊長のご令兄長澤泰治様、令弟の長澤光夫様。それに連絡に当たってくれた堀様と私の四名。

伊祖高地では私が描いた埋葬地の地図をもとに、既に発掘作業が進んでいる。私は私の地図に誤りのないことを祈りに祈った。同時に、中隊の血で染めた伊祖の埋葬地点を、なんでこの私が判断するものかと力んでもみた。しかし長澤中隊長あの尊者とした高地を夜襲した夜から、既に二十五年の歳月が流れているのである。私には昨日のような記憶でも、四半世紀の間には伊祖の地形も変わったであろうし本土復帰を目前にした沖縄では、建築が急増したとも聞いている。もしかすると実際の埋葬地の上に、大きな建物が立っているのではあるまいか。もしそうだとすれば、現在進行中の発掘地点さえ果して信じてよいものかどうか疑わしくなってくる。

いや、しかし私は思う。たとえ二十五年が経過して、いようと、夜空に降下する照明弾の真下を前進し、台上の米軍に斬りこんだあの夜の印象ばかりは、私の生きているかぎり断じて消えることはない。まして台地の崖下から左へ三十米寄った埋葬地点は、大地震でもないかぎり、家屋の建つ場所ではない。

円い窓から紅色の朝の太陽が射しこむ。飛行機はもう紀伊半島の上空を飛んでいる。

「織田さん、珈琲はいかがですか」
長澤専務(NHK)が隣りの席から珈琲を取って下さる。

「似ておられるなあ。」

私は珈琲の紙コップを受けながら思う。
声までよく似ておられる。いやまてよ。隊長殿の声は、もう少ししひくかったかな。

「織田さんは、衛生兵でしたか」
にこやかに聞かれる。

「そうでありました」

思わず軍隊口調になる。おかしいものである。私は専務を通して、長澤中隊長と話しているかのような錯覚に落ちる。

昭和三十五年の、大晦日のことである。私は座敷に覆転んで独りテレビを眺めていた。NHKの「紅白歌合戦」で

ある。番組が終わりに近ずいて、芸能局長が登場し、出演者代表に優勝旗を手渡した。その瞬間に、私は声をあげて起き直っていた。

中隊長が画面に登場しているのだ。その表情、その身体つき、歩き方。まぎれもなく隊長殿その人ではないか。すぐ電話が鳴った。同年兵の井土邦一君からである。

「オイ、紅白を見たか。ありやあ、隊長どののあにさまだぞ」

私もそう思うと答えた。長澤芸能局長と、テレビの字幕に出ていた。姓も同じだ。

しかし、なんと宇潤なことであるか。私は沖縄から復員すると、当時千葉商船学校跡に設けられていた復員局に出頭し、帰途、東京荻窪の長澤家へ伺って隊長殿のご尊父金之丞様、ご令兄泰治様の奥様にお目にかかって、沖縄の戦闘報告をしているのだ。しかし、いくらなんでも、隊長殿のお兄様が芸能局長になっておられようとは思って見なかった。

機は白い噴煙をあげる桜島の上空を通過し、なつかしい南西諸島海面をぐんぐん南下して行く。群青に澄んだ冬の海は午前の陽に光って、眩しいような美しさである。

昭和十九年八月十六日、華北の呉淞を出港した私たち二十一大隊は、輸送船和浦丸以下三隻に分乗して、この海面

を沖縄へ向った。暑い苦しい航海であった。

敵潜水艦を警戒しながら、煮え立つような船中で、軍馬と共に熱暑に喘いだ。あの時一踏だった戦友は、いま何人生き残っていることだろう。須崎治良八兵衛、吉田広繁伍長、鈴木義正伍長、佐藤官雄伍長、中島幸雄伍長、井土邦一伍長、それに私。三百人もいた中隊員が、指を折る位になっている。

この年、十一月六日の夜、名古屋の須崎さんから電話がきた。

長澤隊長殿の埋葬地を記憶しているかという問合わせてある。私は答えた。覚えていない所ではない。私がこの手で掘った地点だ。忘れる筈がない。現に埋葬地点の詳細図を書いてある……。すると、明日の朝、その地図をもって会社へ来てくれという。

須崎さんの説明によると、長澤専務は沖縄のNHK総局慰霊祭にNHKを代表して出席されたとき、伊祖高地で中隊員の供養をされて来たが、その折案内に立たれた婦人の方から、もしご埋葬の場所がハッキリ分れば部落でご加勢申しあげますからと親切な申し出で受けられたという。

私の、受話機をもつ手は震えた。二十五年間、待ちに待ったこの日が遂に来たのか。

私が農作業の合間に描いたこの地図が……、たとえ地

獄の底に行っても忘れられぬ記憶を元にかいたこの地図がもしかするとお役に立つのかも知れない。

夢中で受話機を置いた。茶室の奥から地図を取り出して、もう一度点検した。特に、隊長殿ご戦死の地点から埋葬地点に至る距離、当時の地形など。十分に見直して、翌朝須崎モーターズへ届けた。

地図は航空便で沖縄本島伊祖部落の銘初子様へ送られ琉球政府援護隊の徳田安全様、NHK沖縄総局の秋山総局長以下の方々、部落自治会長銘初盛一様の全面的なご協力の下に早速発掘作業に入った。十一月二十九日のことである。部落給出で崖下の樹林を伐採し、突に四ヶ所を試掘した所、正しく私の地図の埋葬地点から五体の遺体が発見された。この電話に接したのが、忘れもしない十二月一日の夜十一時――。

けれど、何分にも伊祖台地は日米両軍争奪の要地であった。長澤中隊が夜襲をかけた直後も、両軍の激突はなお続いている。現に同じ大隊の加藤隊（第一中隊）は、台地一帯で敵戦車を攻撃し白兵戦を演じているし、歩兵砲小隊もこの台地に向けて近距離射撃を実施している。奪ったり、取られたりの死闘が中隊夜襲の後に何度か繰り返されている筈である。してみれば、日米戦死者の埋葬も、当然この附近で行われたであろうし、結局は私のこの眼で現認する

以外、方法はないのである。埋葬作業に従った戦友はその後の戦闘で殆んど戦死し、私とただ二人生き残った船橋敏雄君さえ、昭和三十八年に死亡してしまっただ。いま、生存者は私一人しかない。

長澤専務も口にご出されませんが、どんなに私の現認に期待を寄せられていることだろう。凡らく、収骨の望みは絶っておられたであろうのに、私の地図が大きな波乱を巻き起したことになる。発掘地点がもし間違っていたら、私は皆様になんとお詫びをすればよいのか。

十二時十五分、那覇空港へ着陸。拭ったような快晴。昨夜までの沖縄は、突風を伴う凄しい暴風雨であったという。ああ、夢にまで見た沖縄へ来た……。

香和ホテルで昼食。直ちに伊祖高地へ向う。綺麗に舗装された軍用一号線道路が垣々と北部へまっすくに続き、沿道には基地風景が展開する。これがあの沖縄であろうか。爆煙と瓦礫と、間断ない艦砲射撃の下で、血と泥にまみれて戦った沖縄。悲惨で貧しかったけれど、必温まる人々の多く住んでいた沖縄。あれはどこへ行つたのであろう。道も家も新しく、人々の服装も真新しく見える。が、ここは外国の基地の町ではないか。

車は一号線を北へ走る。
ああ、ここは中隊が上陸後、炎天下に行軍した所。北支

の河内作戦以来全く行軍はなかったので、この時の強行軍はとても苦しかった。一日行程で那覇から本島の西海岸をぬけ、普天閣から泡瀬まで歩いた。ここで、私は水を飲んだ。手の甲に刺青のあるお婆さんから、黒砂糖の大きな塊を買った……。

もう、私の頭は昭和二十年に逆回転している。

この年三月中旬。

沖縄周辺に遊戈（よく）していた敵機動部隊は急速に数を増した。空襲と艦砲射撃は、昼夜の別なく沖縄本島に集中した。

三月二十六日、那覇市西方に浮かぶ慶良間（けらま）列島に米軍は上陸を開始した。

その夜から座間味島のあちこちに烽火のような火光が望まれた。米軍の砲火に民家が焼け落ちて行く炎である。

私は安波茶の台上からこれを望見して、云いようのない悲傷に打たれた。海上の離島とはいえ日本の一角がすでに燃えおちているのである。敵の本島上陸は近いであろう。

三月三十日、三十一日は那覇、読谷の間、特に北谷、嘉手納方面の砲撃は猛烈を極めた。そして四月一日払暁、艦載機数百機が空を掩ってとび交うなかに、幾百隻の上陸用舟艇は、餌にむらがる蟻のように白波を蹴立てて嘉手納に接岸した。

牧瀨の河川以北に撃退すべく夜襲せよ。

命令は直ちに各小隊に下達された。

第一小隊は中隊の右第一線となり、安波茶より伊祖に至る稜線を前進して「掘削り」で待期。第二小隊は伊祖南方の凹地を前進し、伊祖高地西方地点において待期。第三小隊及び指揮班は伊祖高地に連結する凹地を通過して台地正面より前進する。攻撃発起は各隊同時の午前二時、長澤中隊長は第三小隊、指揮班を直卒する。

各自軽装、消音に留意せよ。帯剣は靴下で剣鞘を覆い、軍靴は地下足袋にかえよ。背中には目印しの白布を装着し合言葉は山と川。火光は絶対に敵襲せよ。

指揮班では、玄米の握り飯を二個づつ配った。器具は全部壕内に残してきちんと整理した。そして互に背中に白い布を掛け合った。

私は衛生兵である。部下の船橋上等兵と二人で衛生材料を整理し、梱包にして壕の片隅に積み重ねた。汗が滴り落ちるが、拭っている暇はない。早々に夜襲の身支度をすませる。軍衣は袴（ズボン）の中に巻き入れ、地下足袋に履きかえた。巻脚絆をきりりと巻き直し、端末の紐の紐を伸ばして袴の縫い目で結んだ。剣鞘は靴下で包んだ。鈴木舟長が十字剣と円匙を片付けている。

思えば昨年（昭和十九年）八月沖縄に上陸以来、私たち

私たちは小銃に着剣し、銃を決して攻撃命令の下るのを待った。水際攻撃は今である。だが、命令は出ない。友軍砲兵は一発も発射しないではないか。

——何故、射たん！

安波茶台地上陸軍を遠望しつつ、拳を握りしめた長澤中隊長の表情を忘れることが出来ない。

果せるかな。上陸軍はその日の中に本島を両断し、嘉手納海岸に橋頭堡を完成した。

四月三日、陣容を立て直した米軍二個師団は、忽ち南下に転じた。

四月十九日早暁、敵はシャーマン戦車（M4型）を先頭に牧瀨の河川を突破し、一挙にわが大隊の守備線を強襲した。

第一中隊、加藤隊の守備する城間高地。第三中隊、長澤隊の守備する城間、伊祖の線は敵の前哨部隊によって占拠された。伊祖四十八高地は、米軍二個大隊の占領する所となったのである。敵の急襲により、高地直下の大隊本部壕は敵中に孤立した。大隊医務室、経理部、師団無線の通信隊が壕内に閉じこめられたのである。

四月十九日午後六時。大隊本部より攻撃命令が下った。攻撃命令。

——長澤隊は伊祖台地に馬乗り占領せる敵を攻撃。一挙に

の敵は琉球珊瑚礁の岩盤であった。中城湾に臨む熱田部落、知念半島の久手堅、そしてこの安波茶部落と、中隊は必死の力を振りしほって固い岩盤を叩き、割り、掘削して陣地を作った。円匙と十字剣と小量のダイナマイトだけが私達の主戦兵器であったのだ。

その兵器で、知念では地下二層構造の陣地を作った。空気が開き湧水を導入し、弾薬を貯蔵した。攻めるによく守るに強く、たとえ何百発の砲弾を注がれようと微動もしない陸軍陣地であった。そこを棄てて、中隊はこの安波茶へ移駐して来た。武部隊（第九師団）の台湾転出がその理由であるときかされたが、上陸以来三度目の陣地替えである。作戦の変更は仕方がないが、三回に及ぶ陣地替えは余りにもせつない。しかし、私たちはここでも掘った。十字剣の屈強な柄は折れて飛び、鶴嘴の金属は半分減った。それでも掘った。掘りまくった。

米軍機動部隊は既にウルシーを発していた。その進行方向が沖縄であれば、中隊はこの未成陣地で米軍と戦わねばならない。中隊全員が、凄じい行相で掘った。敵機動部隊は硫黄島に上陸し、続いて守備隊栗林兵団は玉砕した。敵が次に指向するのは沖縄である。

悪疫も飢饉も、空襲や爆撃さえ私たちは忘れて掘った。せめて、陣地掘成までもって行かねば敵の上陸に間に合わ

ぬではないか。

壕外では砲撃の音が轟いている。嘉手納の沖合いから、敵の艦艇群は小止みもなく射って来るのだ。時に、照明弾の火光が壕口に射して来る。

午後十時——出発である。

中隊長は、指揮班一同に集合を命じた。

洞窟内の一本の蠟燭が隊長殿の横顔を浮かび上らせた。今日も兵服を着ておられる。階級章は、上陸以来全員外している。長靴も、無雑作な騎兵の長靴である。この人程「将校風」に選い人を見たことがない。歩兵砲の出身であるが、突兵指揮が巧みで、号令は大隊一であった。一兵の胸にまで泌み通る声。

端正な顔に悲壮なものが滲んでいる。

「皆今日までよくやってくれた。これが最後の別れになるかも知れないが、立派に戦ってくれ。いいか……」

(この姿は、今もお腹に焼きついて離れない)

隊長殿の手から、恩賜の煙草がまわされた。

一同で喫った。水筒の水で別杯を交わした。

住みなれた洞窟陣地を出た。

月はない。漆黒の闇。

尖兵二名を出発させ、中隊長先頭。指揮班、第三小隊の順に一列縦隊。各兵五米の間隔をとって前進した。誰も一

言も発しない。足音もない。私は、指揮班の二番目を進んだ。前に行く鈴木伍長の背中の中白布が、闇にはの白く揺れる。夜光時計は午後十時を廻っている。

海上からの艦砲射撃が前後に着弾し土砂を吹きあげる。海上と陸地から照明弾があがる。宙空に浮かんだ光の玉は白光を撒きちらしながらゆっくりと落ちてくる。牛の背のように連なった台地の稜線が、くっきり浮き上っては消える。その度に、私たちは伏せた。

安波茶から伊祖高地までは僅かに二軒。

砂糖黍や甘藷畑のなかで、私たちは何十度匍匐(はふく)

前進をくり返したであろう。

縦隊は伊祖公会堂南側の窪地を廻り、北側の井戸付近で停止した。攻撃発起の午前二時を待つのである。仰げば、伊祖高地は夜闇のなかに黒々と山裾を抜けている。一小隊

二小隊はどうしたであろう。突如、高地の左側に当って激しい銃声が上がった。第一小隊が発見されたのではないか。

二小隊はどうなったのか。もう待ってはおられない。

——行くぞ。

おしころしたような隊長殿の声。

よし。私は拳銃を握りしめた。

右は生い繁った樹林。左は甘藷畑。前方、坂の上は鬱蒼

として真々暗な森……。

一気に駆け登って、樹木の蔭に伏せた。敵影なし。各自首もなく匍匐前進を続けて行く。真の闇である。もう台地は近い。突っこむぞ。

バーン。

頭上に照明弾が上がった。しまった。崖上の敵からまる見えである。

隊長殿がぐいと身を起した。私のすぐ左である。

「突っこめ」

軍刀を振りかざした。同時に台上の敵兵は自動小銃を乱射した。何名かが倒れた。猛烈な火箭が前後左右に走り、焔煙が立ちこめる。

「おいノ医務室の壕に入れ」

崖下から東田少尉の声である。

一団となって、大隊本部壕に雪崩れこんだ。

十二、三名であつたらう。

壕内には大林軍医大尉。白井衛生曹長。衛生兵二名と担送患者二名。経理部には兵二名。師団無線には大尉一名。下士官一名。兵三名が健在であつた。

頭上で、敵はまだ射っている。自動小銃、軽機関銃の乱射である。態勢を整えた。

東田少尉が崖の上を窺がい、呼吸を凶っている。射撃の合い間を狙うのだ。

少尉の軍刀が動いた。私たちは壕外に飛び出した。一斉に手榴弾の安全栓を抜き、台上の敵軍に投げた。私は二発投げた。

激しい閃光と爆発音が続けて起った。敵兵の叫びが聞えた。

駆け登って高地を占拠した。しーんと嘘のような静寂。敵影はない。撤退したのであろう。激しい焔煙の匂いだけが立ちこめている。

まだ夜の闇が濃い。天明には間がある。敵はいつ逆襲に転じて来るかも知れない。いまに戦車を先に立てて襲撃して来るであろう。

二名の歩哨を立てた。直ちに戦死者の収容にかかる。

台地の崖を飛び降りて、一同隊長殿の所へ駆け寄った。

そこは台地の直下である。崖から突出した大岩の上に、中隊長は軍刀を構えて伏せておられた。この突出した岩に片足をかけ、左手に草を掴み、右手に軍刀を振りあげ、まさに一眺して米軍に斬りこもうとした時、台上からの一斉射撃に洒されたのである。壮烈な戦死である。無念であられたらう。

大岩の脇に鈴木五長が銃剣を掴んで倒れている。この人は華北戦線では、中隊長の当番であつた。いつも隊長殿の身辺に付き添って、指揮班をよく纏めていた。私の家か

ら程ちかい西加茂郡の出身である。気の優しい、よく気のつく下士官であった。鈴木伍長をひき起したとき、星灯りに彼の屠剣の切っ先が光った。

伊祖高地から牧湊まで、敵の行軍の縦列が長々と続いていたという。それが昨日の朝の報告である。一分も猶余してはいられない。私達は塚穴を掘った。崖下から、正確に左へ三十米寄った甘藷畑。そこに私たちは深さ四尺、巾四、五間の横に長い穴を掘った。大隊本部壕の円匙、十字鉞、スコップを使用した。土は柔らかい粘土質であった。隊長殿と鈴木伍長は確認したが、他の三名は戦闘下であり夜間のため記憶が定かでない。

遺体の埋葬が終わった時、東の台上が明るい金色の輪に染まった。美しい沖繩の太陽は、新しい盛り土の上に爆乱と降り注いだ。しかし、いまは供えるべき花もない。

第一小隊、第二小隊は遂に台上に到着しなかった。

「敵ーイ」

長く尾を引く歩哨の声が台上に起る。

一同、小銃、手榴弾をひっ掴んで台地に駆け上がった。迫撃砲の発射音、閃光が空気を切り裂いて敵歩兵群の鉄帽が坂の下に隠見する。忽ち、前後に砲弾が落下する。機銃弾が岩角をえぐって飛ぶ。

ばらばらと敵兵が散開する。猛烈に射って来る。が、近

接しない。くそッ、急造爆雷はないか。あいつを抱いてとびこんでやりたい。

「退れ、少しづつ退れ……」

東田少尉の声が横でする。ちりちりと私達は後退した。そして崖下の壕に入った。

こうして、風間は米軍が台地を占領する。夜間は私たちが斬りこみをかけて奪換する。四月二十七日まで交互に占領を繰り返した。その中、弾薬、食糧がなくなった。とうとう伊祖高地を放棄した。その直前、重恩二名を急造担架で後送した。二十八日の夜、小野田伍長以下三名が壕外へ出た瞬間直撃弾が壕口に炸裂した。

私たちは三君の上を毛布で覆い、合掌して壕を出た。それから五十九高地の大隊本部に合流した。

車は牧湊海員会館の横を入れて、伊祖高地に近づく。大きな高圧線の鉄塔が見える。真新しい住宅が台地の中腹まで及んでいる。私の予想した通りである。もしかすると……私の胸は早や鐘を撞いた。

高地の入り口に着いた。坂の上では大勢の人々が作業をしている。車の扉をあけてぐるりと高地を眺めわたした。

ああ、二十五年前の戦場……この道は私たちが隊長殿を先頭に、暗夜一氣に駆け上った地獄の道。私は地下足袋を用意して来たのに、履きかえるのも忘れて一敷に坂を駆

け登った。

隊長殿、隊長殿。織田が参りました。おおい、戦友。織田兵長が迎えに来たぞ！

涙と汗が一踏に噴き出した。大勢の目目がなければ、私は地を打って慟哭したに相違ない。

「織田さん、現認して戴きますか……」

琉球政府援護隊の、徳田安全さんがきく。

私は冷静にかえた。畑から目測で右へ約三十米歩く。背文を没する雑草を分けて進んだ。左手に大隊本部壕があった。壕口は一噴もある大石に掩われ、内部は密閉されて入れない。十二月というのに草いきれが強く、汗が玉になっ

ておちる。ここだ。隊長殿の戦死された場所へ出る。あの大岩は昔に掩われ、鮮やかな緑が木洩れ陽を静かに射返している。歩数にして正確に六十歩、三十米である。

織田よ、来てくれたか。ご苦労だったなあ。

隊長殿の眼が笑っている。鈴木伍長が、起き上ってしがみついて来る……

其処からまた左へ三十米、来た徑をひき返す。よおし、絶対に間違いないぞ。

ここだ。この畑だ。

私と船橋上等兵が隊長殿を抱いて、石角に質きながら塚

穴へ運んだ。そして右から二体目の所へ埋葬した。

「……位置は、間違いありませんか」

長澤専務が静かに聞かれる。

私は不動の姿勢をとった。

「間違いありません。確認いたしました」

はつきりと証言した。

収骨が終った。五体のご遺骨を五つの麻袋に納めた。

その場所に臨時の祭壇を設け、私たちは本土から持参した水と餅を供えた。

真教寺の田原惟信師が読経される。

部落の人々。援護隊の人々も、私たちと一緒に祭壇の前に立った。

長澤泰治様、長澤光夫様の焼香、続いて私も。

隊長殿、四人の戦友達よ。伊祖の風霜に耐えて永いながい歳月。どんなにか日本へ帰りたいかであったであろう。さあ一踏に帰ろうぜ。

私は珠数をつまぐりながら、呟いていた。

午後、火葬場で焼骨。

その夜、長澤専務は伊祖の方々、琉球政府の人達を料亭に招かれた。その席で伊祖部落の婦人会長、銘刃初子様は私にしみじみと語った。

「……中隊員の方を一体でも多くご収骨したいと思って、

あの畑を広く掘ったのですが、何も出て来ないのですよ。それで朝の中に、もう一度掘り、また掘り直して正午までに都合三べん場所をかえて掘りました。それでも一体も出て来ないのです」

部落会長さんは云ったという。何といっても二十五年たっている。三回掘って出て来ないということは、地図を描いた方の記憶が違っていたか、或は地形が変動したのであろう。この辺は工事の為のブルドーザーが何度も入っているから……。それで発掘を中止して、部落の人も帰ってしまったという。

ところが銘刈様が家にかえると急に胸許が苦しくなり、幾らおさえても痛みが止まらない。

そこで、また考え直したという。

「……これは、兵隊さん方の霊が、もう一度掘ってくれと私に頼んでいるのに違いない、と思ひましてね。部落会長様にお願ひして、午後、四回目を掘って貰いました。そうしたら五体きちんと、掘りあてたのですよ」

不思議なことである。そして有難いことだと思ふ。

この時の銘刈様の決意が、最期の決め手となったのである。改めてお礼を申しあげたい。合掌。

後記
当時の「琉球新報」(昭、四五、二二、二〇)の記事を次に掲げます。

「中隊長はここで戦死」

—東京の長沢さん、遺骨の弟と対面
—浦添市伊祖。一戦友が案内

「中隊長殿の遺体を埋めたのはここです。間違ひありません」—十八日午後、二十五年前の沖繩戦で散った上官の最期を見届けた唯一の生き証人が遺族らを伴い、浦添市伊祖の激戦の丘をさがっていった。

記憶に誤りはなく、やがて掘り起された遺骨の上を練香の煙が流れた。

生き証人は愛知県岡崎市東阿知和町字前田の農業、織田直澄さん(四九)。そしてこの日、ようやく目の目を見たかつての中隊長は、東京都杉並区上荻二ノ六ノ二九、NHK専務理事、長沢泰治さんの実弟、故長沢文雄陸軍大尉(当時二十七歳)。ともに沖繩守備に当たった「石部隊」、独立歩兵二十一大隊第三中隊の将兵だった。

「伊祖高地の戦い」は沖繩戦の最大の激戦といわれるも

ので、日本軍司令部のあった首里の高台を背に、前衛線になつていた。

織田衛生兵隊長は収骨の手を休めながらこう語る。

「二十年四月十九日の夜、高地奪還の命令を受けて、長沢中隊は切り込みをかけたんです。抜刀した中隊長殿が先頭を切つて丘を目ざしたとき、上に陣取る米兵が照明弾を投げ、真昼のようになったところをバタバタとそ撃されました。隊長殿も壮烈な戦死でした。友軍が手りゅう弾で反撃する間に数人で隊長ほか五つの遺体を引きずり下ろし、間に合わせの穴を掘つて……最後を見届けた戦友もその後戦死して私一人になりました」

そして織田さんは「慶良間(諸島)がよく見えますね」と小手をかざしながら、遺体の目じるしにした大きな岩を見上げるのだった。

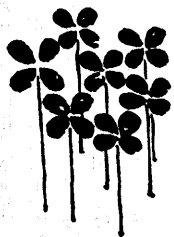
長兄の泰治さんから長沢さんの遺族は故人が、「伊祖の戦い」で散ったことは承知していたが、この地区の守備隊の大半が愛知、岐阜出身だったことを聞き、最近になってようやく織田さんにめぐり合ったという。

地元の人たち、琉球政府職員もこの遺骨収集に全面的に協力、さきごろ織田さんが送ってきた地図をたよりに発掘を続けてきた。

この日現場に立ち合ったのはこれら協力した人たちや、

遺族ら約三十人。急ごしらえの祭壇に遺骨や主のわからぬ水筒、メガネを並べ、供養も行った。

このあたり、激戦地あとにはいまでも遺骨はころがっているが、身元が確認されることはきわめてまれで、最後に長沢泰治さんは「織田さん、地元の皆さんに何とお礼をいっていいのか戸惑っています。弟に代わり、私はただ黙って頭を下げたい」と、二十五年ぶりの感慨をかみしめていた。



伊祖夜襲前後

鈴木 義正

「各分隊は至急、第三小隊の陣地に集合せよ」

地下足袋履きの伝令が、早口に伝えて走り去った。

今夜、夜襲だな。

分隊長の私は直感した。

武装してすぐ第三小隊陣地へ行くより分隊員に伝えた。

暗い壕内で、一同の眼がピカリと光ったように感じた。

伊祖高地は、この安波茶部落から直距離にして二軒。中隊陣地の中では、この第三小隊陣地が一番近いのだ。よおし、今夜はぶちかましてやるぞ」

私は分隊員の後からゆっくりと壕を出た。

昭和二十年、四月十九日の午後七時——。安波茶台地の稜線には夕闇が立ちこめていた。

この月一日の朝。嘉手納海岸に上陸した米軍は忽ち沖繩本島を南北に両断し、怒濤のように南下を続けて来た。米軍第二十七師団の尖兵二個大隊が伊祖高地を占領したのが

今曉未明のことである。斥候の報告では高地前面に溢出している敵兵は黒人兵であり、兵力はどんどん増えて来ているという。そして敵の集弾をうけて伊祖高地は売げ山に近くなり、咄嗟の夜襲で、台地の下にある第二十一大隊の壕は敵中に孤立してしまっているのだ。既に、敵の斥候は安波茶方面に出没している。今、先制攻撃を加えなければ、わが大隊は押し切られてしまう。私たちは焦り焦りしていた。

三小隊の洞窟陣地の前で、うちの小隊員が煙節と乾パンを支給されていた。兵達は一本の煙節と二袋の乾パンを大切そうに雑糞に収めている。

「第一小隊の分隊長、陣地内に入れ」

洞窟陣地から、野畑少尉が呼んでいる。

私は自分の分隊員を集め、偽装を命じて洞窟に入った。

兵は各自に偽装網を掛け、木の葉や小枝を附け初めた。兵隊は今夜の夜襲を、敵艦に臭ぎつけて知っているのだ。

洞窟の奥に長澤中隊長が立っておられる。

第一小隊の分隊長五名は、不動の姿勢をとった。

「集合終了しました」

野畑少尉が低い声で報告した。

「命令を伝える。第一小隊は中隊の右第一線となり、伊祖四十八高地の敵を夜襲する。小隊の出発は二十二時。蘇鉄

林の下、堀廻り附近で待期し、午前二時攻撃発起せよ！」

凜として爽やかな中隊長の命令。洞窟の卓上に立てた裸

ローソクがちびちびと鳴って炎が明滅した。更に敵状の説明

攻撃方法、夜襲の注意がこまごまと続いた。そして最後に

「みんな、これまでよくやって呉れた。今夜はしっかり頑

むぞ」

と軽く頭を下げられた。

ローソクの炎が揺れた。

戦闘帽の間隙の下で、中隊長の瞳がきらりと光った。

私は偽装中の分隊員が気になつてならなかった。古年次

兵については心配ない。彼らは北支以来、度々夜襲戦の経験

をもっている。しかし、初年兵は戦闘経験が薄い。

解散がかかると、私は真っ先に外に飛び出した。まだ、

薄明りが残っていた。

分隊員を集めて命令を伝え、偽装を十分するように伝えた。

初年兵には殊に念を入れて指導した。目印しの白布は

一人一人の背中に付けてまわった。

その時である。

小山のように草木で偽装した兵隊が、洞窟陣地から飛び出して来た。びっしりと木の葉や小枝に掩われて、どこが目か鼻かさえ分らない。

「どうじゃ」

と叫んで、私に銃剣を擬した。

第四分隊長、小林鎌太郎兵長である。同年兵で、北支以来の戦友だ。

私は呆れた。北支の戦闘では、どんな激戦でも鉄帽さえ

附けたことのない元氣者なのである。

「小林兵長、お前にも似合わんじやないか。沖繩中の草木

を刈りとって来たか」

「なんの、なんの」

と小林は大声で笑った。

「いま陣地でぜんざいを食って来た所よ。出撃前の御馳走

は気味がわるいので、特に念入りに偽装して来たのよ」

虫が知らしたのであろうか。この時の彼の笑顔が忘れられない。

各分隊は整列を終った。この夜、月はない。

時々海上から照明弾が上がる。稜線がくつきりと浮きあが

る。もう、出発の時刻が近い。

小隊長が分隊の前に立った。抜刀している。

「第一小隊の兵隊よく聞け。野畑小隊はこれより伊祖高地

へ向う。第一分隊より出発」

おしこらしたように低い声。

第一小隊の編成を記す。

小隊長 野畑萬治少尉

- 第一分隊長 畠山忠蔵軍曹
- 第二分隊長 鈴木義正伍長
- 第三分隊長 小野田鈴勝兵長
- 第四分隊長 小林鎌太郎兵長
- (擲弾筒分隊)

以上三十五名

各兵は九九式短小銃に手榴弾二個を携行。小隊の装備は軽機関銃三、擲弾筒二。それに急造爆雷十個であった。小隊陣地には留守当番若干を残した。真の闇である。小隊長を先頭に、小隊は一列縦隊、黙々と前進した。海上の敵艦艇から照明弾が打ちあげられる。一帯が真昼のように明るくなる。無言のうちに伏せる。どれ程歩いたであろう。

野畑少尉の右手があがって、小隊長は音もなく地上に伏せた。

堀割りの三又路である。

前方から「通信」(声の連絡)が来る。低い声。

鈴木伍長、小林兵長、小野田兵長、鬼頭一等兵前へ。私は小隊長の傍へにじり寄った。他の三名も集合する。第一分隊長畠山軍曹は、小隊長と何やら打合せている。野畑少尉は前方の闇を警戒しながら、小声で命令する。四名は小隊長について来い。畠山軍曹はこの堀割りで

待期。

小隊長は中腰で堀割りの土手を登る。私達四名が後に続く。

土手の上に出る。私は小隊長の直後を、全身を耳にして歩いた。敵影は見えないが、何やら私の動に響くものがある。左手に小銃、右手に手榴弾を握りしめていた。

小隊長が私の耳に唇をつけていう。

鈴木、左前方に蘇鉄林がある。あそこへ行け。

私は首肯して歩き出した。

私の影を踏むようにして三米後を野畑少尉。その後を小林、小野田、鬼頭が夫々三米の間隔を置いて従う。

深か深かと沈まりかえった蘇鉄林に近づく。

きーんと冴え返った私の神経の底に、ちかっと棘のよう

なものが突き刺さる。

ふと立ちどまって、後を振り返った。右手に汗ばんだ手榴弾を握っていた。

影か、気配か、それは分らない。

だが、私と野畑少尉との間に、何やら黒い物が立ちはだかっているようだ。

五人はびたりと立ち止まった。

黒暗々たる闇である。

——誰か！

野畑少尉が低く誰何した。答はない。誰か！

なんの答もない。

約二十秒も経過したのであろうか。

突如、足下から切り裂くような火光が起った。自動小銃である。私は、伏せた。頭上を走りぬける敵兵の影が見える。続いて蘇鉄林から射撃音が起った。足から血が流れている。野畑少尉の叫びが聞えた。二回きいた。

照明弾が上った。辺りが明るく照し出された。野畑少尉、小林兵長、小野田兵長がうつ伏せに倒れている。

私は手榴弾の安全栓を抜くが早いのか、側方に投げた。そして走った。砲弾の穴にとびこんだ。その間相当に射撃された。曳光弾が赤い糸を引くように私の足許に集中した。また、照明弾が上った。

私は砲弾の穴から前方を見た。

敵兵の死体のごろごろ転がっている。手榴弾が命中したのである。死体は、照明弾の光りで燐光を放っているように見えた。

敵の射撃の合い間を縫って、私は堀割りまで退った。

堀割り付近では、敵との接触が初まっていた。

私は畠山軍曹に、小隊長以下三名の戦死を報告した。敵の射撃は私たちの附近に集中した。凄い火力である。

顔をあげることも出来ない。見る間に小隊の損害は増えて行く。

突如、一団の敵兵が飛び出して来た。自動小銃を腰だめで射ちつつ、走り寄ってくる。いかん／早く射たねば！

つと、畠山軍曹が身を起す。手榴弾を投げた。何人かが倒れたが、勇敢に突っこんでくる。畠山軍曹が叫ぶ。「おい、軽機。あれを射てッ！」

初年兵の軽機手は、完全に気を呑まれていた。

あつと云う間に、十四、五人の敵兵に囲まれた。畠山軍曹は、初年兵から軽機を奪った。

仁王立ちになって、腰だめの掃射をやる。

また、側方から敵がとび出す。私達は射撃を繰り返した。しかし、小隊の損害は刻々に増して行く。

——畜生、伊祖高地を前に、第一小隊は全滅か、ぎりぎり奥歯を噛む。足の出血は巻脚絆を通して、じくじくと滲みだしてくる。激痛が頭にこたえた。夜が明けた。敵の射撃音だけが轟いている。

砲弾が間断なく落下して土塊をふきあげる。

私は負傷の痛みに堪えて、安波茶部落へ退った。

三小隊の陣地にとびこんだ時には、右足を引きずっていた。

「鈴木班長殿」

津田松太郎衛生兵が駆けよった。

「足ですか。手当てします」

津田兵長は衛生翼を開いて、素早く傷口を消毒した。このほか小隊陣地には、

吉田広繁兵長、岩本繁夫兵長、滝澤正巳伍長、安藤満寿雄上等兵、馬岡清太郎一等兵がいた。歴戦の戦友に囲まれると、昨夜の戦闘が嘘のように思われた。心づよい。

それにしても、伊祖高地を夜襲した中隊主力はどうなったのであろう。私たち第一小隊は全滅の悲運に見舞われたが、第二小隊、第三小隊、中隊指揮班はどうなったのであろう。

四月二十日は晴れ上がった、綺麗な朝であった。

陣地の前方十米の位置に、琉球松が三本立っていた。その下へ、馬岡一等兵を歩哨に出した。敵兵が見えたら、陣地に急報するように命じた。

正午すぎであった。

馬岡一等兵が走りこんで来た。

間もなく自動小銃の音が接近して来た。

来たぞ！

一同、小銃を構えて壕口を注視した。

蒸い暑い日である。銃の握把（あくは）を握る手が汗で

滑る。

ガヤガヤ、米兵の話し声が聞えたと思いと、ポーンと手榴弾が投げこまれて来た。

何おッ！

と吉田兵長がそれを拾って壕外に投げ返した。岩本兵長も、足もとに転がった奴を掴んで投げた。外で爆発音が起る。

自動小銃が撃ちこまれる。狭い壕内は、忽ち燻煙の臭いにむせ返った。

勇敢な敵兵がいる。そろそろ遣い寄って来て、壕の中をのぞきこむ。

ババーンと誰かが射つ。ひよいと頭を引っこめる。またのぞきこんで、手榴弾を投げこむ。

それを拾って投げ返す。

応戦の合い間にちらと奥を振り返る。屋敷をしている兵隊がいる。これには驚いた。弾丸箱を枕にぐうぐう寝ているのである。大胆なのか、阿呆なのか。このドンパチが耳に入らないのか。応召兵である。

オレは中隊に連絡して来る！

声が出る。滝澤伍長である。

——危い、今出てはいかん！

私が制止した瞬間、滝澤伍長は飛び出していった。

あたりが薄暗くなった。

黄香が忍び寄っている。

米兵は後退して行った。

吉田兵長が真っ先に外に出た。私も、足をひきずって壕外へ出た。砲声が遠くなった。

敵兵は陣地入り口に八名の死体を残している。

滝澤伍長は、そこから十五米程の場所に倒れていた。私は彼の小銃を持ちかえった。

戦後、長澤隊慰霊祭で中隊生存者が集ったとき、第二小隊（城戸小隊）の夜襲当夜の行動が話題になった。

私たち第一小隊（野畑小隊）は右第一線となって伊祖へ向い、途中堀割り附近の戦闘で全滅した。第三小隊（東田小隊）は指揮班と合流し、長澤中隊長直率の下に伊祖台地に到達した。すると、左第一線となって中隊主力の左側を前進した第二小隊はどうなったのであろう。おそらく伊祖高地の手前で敵と接触し、私たちの小隊と同じ運命を辿ったものと思われる。が、一名の生存者さえない今日、その事実を突きとめることは永久に出来ないのである。

ああ、五十九高地

井 土 邦 一

（旧姓 山内）

五十九高地……。

沖縄戦について数々の思い出をもつ私であるが、あの世に行ってもなお忘れることのできない一つが、あの五十九高地である。

そこは小高い丘で仲西の飛行場がすぐ眼の前にあった。その向うには見事なエメラルドに輝く南國の海が果てもなく広がっていた。

丘上には琉球松と蘇鉄が一面に繁って、一見なんの変哲もない丘陵であったが、実はこれこそ自然が設計した洞窟陣地であった。

琉球松や蘇鉄におおわれた大地の下は、全部が鍾乳洞なのである。

三ヶ所の入口は外部から全く見えず、東側の入口がいちばん大きくて、兵隊はいつもここから出入りしていた。南側や北側にある口は小さなもので、ここは爆風ゆけの安全装置の役目を果していた。

洞窟の天井からは氷柱のような鍾乳石がびっしりと垂れさがり、その中の太いものは戦闘に備えて叩き落とされてきた。一隅には少しではあるが湧き水もあった。

優れた陣地と云うものは味方の損害を最少限に食い止める外に敵に多大の損害を与えるものでなければならぬ。その意味からすれば、所詮この高地は退避場すぎなかつたのかも知れない。兵隊はそれを十分に知っていた。

牧湊(まちなと)、伊祖、安波茶、城間(ぐすくま)と僅かな間に幾年分の戦闘を多くの陣地で戦って来た独歩第二十一大隊の将兵であった。

大隊本部、各中隊の生存者は、零々二百名もいたであろうか。大隊長西林中佐は東側の入口近くに陣取っていた。重なり合うようにして暫しの仮眠をむさぼる兵隊達は、携帯天幕を敷き、別の天幕をカーテン代りに下げて「個室」にどっかり胡座をかく大隊長の姿に、どんな感慨をもったであろうか。一樣に明日をも知れぬ生命であった。しかも兵隊は満たり落ちる雪の下で、それを一言も言葉に現わさなかつた。

負傷兵でも、繻帯をしているのはよい方であった。さくろのような大腿部の傷口から、痛い痛いと言いながら、蛆(うじ)を拾いあげる兵連もあった。ああ痛かろう、かわいそうにという者さえいない暗胆とした状況……。人数も

分らない位に多い負傷者の数であった。

嘉手納(かてな)からここ城間後方まで、約一万の日本軍を蹴散らして来たアメリカ第六海兵師団は、わが陣地から北東五百メートルの表畑に展開していた。「M4」と呼ばれるシャーマン戦車も不気味な姿で表畑に布陣していた。時は昭和二十年四月二十八日であった。

その第六海兵師団が翌二十九日攻撃を開始するであろうことを、私達は知りすぎる位知っていた。しかし負傷者が轟き、戦闘に叩きのめされた陣地にも、明るい期待がないでもなかつた。

在支日本空軍と九州の第六航空軍が二十九日の天長節を期して天一号作戦に協力、沖繩の米軍を一挙に攻撃するというのである。

——久しぶりに日の丸の翼が見られるんですね。

——その時は沖繩の日本軍も総攻撃に移るそうだ。

——しかし、制空権のない海の上を、どうして飛んで来るのかなあ。

——いや、聯合艦隊の一部も協力するそうだ。

——暗らめとも、喜びとも、期待ともつかない兵隊達の感情が暗い壕のなかに渦巻いていた。

果して明日の天長節はどうなるのであろう。不安と焦燥のなかに、五十九高地にも夕闇がしのびよった。

砲撃の音が一際激しくなった。

どこで都合したのか伊藤精之助上等兵が、兵長殿食事をしましように云う。改めて食事とは何かと私は少し不思議な気がしたが、部隊長の個室の前を通りすぎて二人で壕の入り口へ出た。

誰もいない。敵の砲撃も一休みになったようだ。見あげる星空に、照明弾が二、三発浮かんでいる。伊藤上等兵が飯盒(はんごう)に盛って来たのは、なんと珍しい白い飯であった。その上、どこから持って来たのか牛糞もある。掛け盒に白い飯を二つ盛って、伊藤は帯剣で牛糞の蓋を切った。ふと、私の顔を見あげた。私も照明弾の灯りのなかで伊藤精之助の顔をじっと眺めた。

云わず語らずのうちにこれが二人の最期の晩餐である。野戦の荒涼を忘れた。胸がきゅっと痛くなった。

なんの信号であろう。友軍の赤吊星が夜空に一つあがった。

伊藤は三重県出身の、妻子のある補充兵であった。私が大隊副官に進言して事務室附となり、私が事務を教えた時には私の助手になったりして仕事を手伝った。十歳も年上の彼に私は先壁面をしていたが、可愛かった。彼も私によく親しんでくれて、楽しい毎日を送ったものである。空腹に白い飯。米軍上陸以来はじめてのご馳走である。

美味かった。

食、べおわって伊藤はいった。

——兵長どの、もうこれは要りませんね。

飯盒をボンと捨てたのである。ああ、彼もまた明日の運命を知っている。私は何もいえなかつた。三々五々、ささやかな夕食をとっている兵隊の胸に去来するものはなんであつたらうか。

午後八時十分。人生最後の夜の仮眠に入ろうとした時である。大隊長と呼ばれた。戦闘詳報と現況報告書を旅団長に届けよというのである。これは私にとって、実に運命的な命令となった。

直ちに伝令の与那嶺(よなみね)一等兵と壕を出た。威嚇射撃が激しい。照明弾が夜空に三つ四つ。真昼のように明るい戦線である。

重機一、軽機二、擲弾筒二の装備しかない五十九高地。あとは小銃と肉弾だけの五十九高地。神山島から発射する敵の長距離砲が、遠雷のように轟く四月二十八日の夜である。

——二十一大隊の命令受領者御苦労。そこで仮眠するよ

うに……明朝迄に命令を達する。
旅団の高級副官が私たちを副官室の隣りの壕に招き入れてくれた。いたわるような高級副官の目が嬉しかった。

仲西飛行場から約一軒離れた旅団司令部の壕も、中尉や大尉の階級軍が目につく程、慌しい出入りであった。

ふと、目を覚ました。午前四時を少し廻っていた。あゝ遂に二十九日は明けた。今日こそまぎれもない四月二十九日なのである。命令はまだ出ない。南国の夜明けは早い。私は焦った。早く命令が欲しい。どうなっているのだろう。私の胸は早鐘のように鳴った。五時過ぎであったらうか。副官の当番伍長が呼びに来た。

高級副官は静かにいった。

——三時の定時交信に、五十九高地の五号無線と交信出来た。故障が治ったのだらう。感度不良でサラ(再信)の連続だったが旅団長閣下の命令は伝えた。次の交信は六時であるが、万一のために暫く待期するように。

二十一大隊の運命を賭けた四月二十九日は刻々と流れて行く。

日の丸の翼は一機も来なかった。五十九高地の兵隊達のあの祈るような眼を思い出した。私自身が悪いことを置したような後ろめたさを覚えた。

午前十時、高級副官が私の前に立っていた。

——西林中佐から打電して来たが、感度不良で、何度かサラしたが電文がとれない。所々は判読できるのだが最後の閣下：祈る：だけが不思議にとれたのだ。お前は伝令と共に

に司令部と行動を共にせよ。西林大隊は全員散ったのだ。御苦労であった。

高級副官は私達二人に、およそ軍隊口調とは程遠い、あたかも子供にさとすような口調でいった。

全員散った……。

嘘のようである。夢のようである。しかし現実には、確かに間違いない五十九高地は全滅したというのだ。私は自分の血が静かに逆流するのを覚えた。

「与那嶺、みんな戦死してしまっただぞ!」

「ハイ……」

与那嶺はつぶやくように、うつむいたままだ。今日はいっつになくグラマンの響きが大きく、迫撃砲がすさまじい。

昨夜までは禁止されている沖繩方言を使って、小声で同年兵と囁き合っていた彼……。彼の心も私にはいたいように判るのである。焦燥とも諦めともつかない感情の底で、撤退間近かな旅団司令部の空気が慌しく殺気立っていた。私たち二人の存在など、構ってはいられないのである。

夕刻、私は高級副官の前に不動の姿勢をとっていた。今日一日で纏めた自分の意見を、いや私の我儘を開陳していた。

——自分は二十一大隊の一員であります。全員玉砕したと

た。

——さあ、俺の五米後をつけて来い。俺の通りに行動するんだぞ。いいか。

司令部の壕を二人でとび出した。

敵の照明弾の光りをいやという程浴びた。五十九高地までは行程約三杆である。私は拳銃と手榴弾、与那嶺は小銃と手榴弾だけ。他の装具は一切司令部に残して来た。もう何も要らない。可能なかぎりの軽装であった。ただ、生存者に飲ませる水だけは水筒に並々と満たして来た。

仲西飛行場を通過した。五十九高地へ続くゆるやかな勾配が見える。私たちはその急坂を、照明弾を気にしつつ一気に走った。伏せる。艦砲の着弾だ。さあ、合い間を縫って走れ。ついて来いよ……。威嚇の機銃弾がここここに土煙をあげる。十五夜よりも明るい戦線の夜。

三十分も歩いたであろうか。

——おや。

例の硝煙と土と草の匂いが鼻をついた。あの、戦闘直後に瀰る臭いである。着弾がいつの間にか遠くになっている。これは米軍の歩哨線に近いのだ。

——待て。

私は手振りて与那嶺を制止した。伏せる。

岩蔭に遮蔽(しゃへい)して、正面を見た。

——(与那嶺の随行を断ったが、本人はどうしても行くとい

ってきかなかった)

副官は険しい表情で私を直視した。明らかに難色を示しているが、閣下にお伺いしようと足早やに出ていった。十分程して副官は戻って来た。充分に注意して出発せよと許可してくれた。

——必ず生きて還って、閣下に状況を報告せよ。閣下も期待しておられる。

私は与那嶺の手を握った。

「与那嶺よ。おそらくこれが別れになるろう。よく俺と行動を共にしてくれた。また靖国神社で一詣に暮そうじやないか」

彼は、私の手をしっかり握り返した。じっと私の眼を見

アッとは声を呑んだ。
前方三百米の丘に米軍の歩哨が見える。二人哨である。一人立哨、一人はマシーン、ガンに手をかけて動哨している。

まだ見える。東の稜線の高い地点と、西海岸よりの斜面に約三百米の間隔をおいて二つの銃座が見える。もうここまで敵は前進しているのだ。こいつ等が戦友を殺して来た奴等なのか。私の軀は小刻みに震えた。遙か後方になつかしい五十九高地が見える。照明弾は会釈もなく頭上に照りつける。畜生。新しい敵愾心が燃えあがる。

私は海岸側の歩哨線を突破しようと決心した。やや左よりに進路をとり、足音に注意しつつ息を殺して前進した。ダダッと一連射、威嚇射撃の機銃弾が足元に砂煙りをあげた。

五十九高地は右手に見える。

偶然といえは偶然だが、陣地入口へ通ずるやや低い沢を見つけた。その沢を挟んで歩哨線がある。この歩哨線の間隔は、他の歩哨線より少し長目である。嬉しかった。よしここなら入れる。与那嶺の耳に唇をつけていった。

俺の通りにするんだぞ。

彼の銃帽が動いた。

いよいよ最後の行動開始。夜光時計は八時三十分を指し

ていた。

戦友よ、山内と与那嶺がいま行くぞ。
両側の歩哨に気づかれないように、進んでは止り、伏せてはまた進んだ。

歩哨線に入った。気のせいか照明弾の数が増して、一段と明るく照りわたっている。万一、左右どちらかの歩哨の眼にとまったら、マシーン、ガンは二人の軀を蜂の巣にするであろう。第三匍伏に移る。緊張のためしきりと咽喉が乾いた。機銃弾が、また一連射頭上に鳴った。なおも進んだ。見覚えのある三角形の、五十九高地の大岩が見えて来た。

遂に敵の歩哨線を無事突破したので。

恐怖を忘れて、私はいきなり立ちあがった。

おお、五十九高地よ。二人は陣地入口に突進した。

屍臭、煙臭、そして青臭い戦場の臭いが一面に漂っていた。あれ程生い繁って高地を掩っていた松や蘇鉄は、激しい砲撃に殆んど吹っ飛ばされた。陣地は一変している。

ああ、戦友が；戦友の屍が五体；七体。

昨日の夕方、伊藤精之助と食事をした壕の入口へ来た。

私たちは黙然とした。

次々にあがる照明弾に照らし出される、この地獄絵図はどうだ。入口に向かって左側は屍の山である。巨象が前足を

折って伏したような屍体の山……。

入口に金歯を見せている浅田中尉。おお、石岡曹長。小田桐曹長。胸を射ちぬかれ、腹を撃たれて内臓の露出した屍。火焰放射を浴びたであろう真っ黒な屍。幾十体あるのであろう。この屍の山はまぎれもなく、私の兄弟たちなのだ。北支以来昨日まで同じ飯盒の飯を食い、共に弾雨の下をぐぐって来た兄弟なのだ。伊藤よ、杉浦よ、原田よ。山内が来たぞよ。私は動揺する気持ちを静めて、やたらに屍体を引き起して見た。

今は照明弾が有難かった。戦車砲の直撃をうけたであろう顔のない屍、手のない屍……。オイやられたなあ……。さぞ残念だったろう。

不思議に涙は出なかった。もちろん、恐怖心はさらにない。入口を塞いだ屍の山をよけて陣地の中へ入った。

ギイッ、ギイッ、私は掌でホタル懐中電灯を鳴らしながら歩いた。右側の部隊長室には十二、三人が斃れていた。懐中電灯の音が、しずまりかえった壕内にこだまする。その光芒の輪のなかに残酷な異様な世界が浮かんだ。動かない負傷者が集って自決したのであろうか。爆風で飛んだ腕がある。上半身がとび散って、それが先に倒れた屍の上に乗っている。壕の壁には戦友の血しぶきが飛び散って

黒ずんだしみを描いている。戦車砲の直撃が何発となく壕内で炸裂したのであろう。天井の岩壁が落ちて、戦友の屍を埋めている所もある。惨酷な戦場には馴れきった私であるのに、凍りつくような鬼気を感じた。

若年兵の与那嶺はさすがに声も出さず、私の後について離れない。この地獄の真相は、おそらく万分の一も他人に伝えることは出来ないであろう。

奥へ入る。あッ、ホタルの光の輪が、白くかすかに動くものを捕えた。誰かいる。生きているのだ。確かに生きている。何一つ動かない死と静寂のなかに白くかすかに動くものがあるのだ。そこは昨日まで負傷兵が覆っていた場所である。床に天幕を敷き、いつも二十人位の負傷者が呻吟（しんぎん）していた見覚えのある場所である。白いものは繻帯であった。上半身を繻帯でぐるぐる巻かれ、顔は眼と唇だけをのぞかせた姿が、そこに大きく映し出されていた。

「誰か！」

「K中尉」

力はないが、比較的明瞭な声である。しかし、もうながくはもたない生命であろう。余りにも語尾の力が弱いのだ。

「お前は誰か……」

「山内です」

「ヤマ……ウチ……ホントウか、私はイキテ……イル」

これはいかん。死期が近い。私は戦闘状況を知りたいのだが、負傷者と一賭にいたK中尉には、おそらく戦況は判らないであらう。

「おい、ミズラクレ……」

私はホテル電灯で中尉の眼を見た。その眼は虚ろであった。

中尉は兵隊に好かれるタイプの将校ではなかった。悪い人柄ではないが、兵との間に断絶があった。

死の直前の人に酷いとは思いつつ。

「中尉殿、戦闘の状況をご存知でしたら教えて下さい。大隊長殿はどうされたのですか。自分の申しあげるとは、お判りになりますか？」

屁臭と硝煙の混合した異臭。与那嶺は一言も発しない。

私の大きな声は、ホテルのたえない伴奏とともに壁壁に響いた。

「水ヲクレ……ミズヲクレ……」

負傷者が水を要求するのは当然だが、いま水を飲ましたら中尉は目の前で死ぬ。

私は聞きなかつた。

——大隊長殿の安否は……生存者は何各位……そして何時頃どこへ脱出したか、等々。

中尉は答えなかつた。

「水だ、ミスだ……ワカランのか」

そして、

「命令だ……将校の命令だ……シヨウコウの……」

この人の断絶はここにあったのだ。この人にはいつも将校風が吹いていた。私も命がけでここ迄来たのだ。若さもあった。上級者に対して失礼とは承知しつつ、

「中尉殿、あなたはもう何分も生きられません。将校の命令とはなんですか。死ぬ時位本当の人間にかえたらどうですか。自分は若しかしたらと思つて、銃具は捨てても水は一杯もって参りました。中尉殿、飲んで下さい腹一杯。永い間御苦労様でした。自分も速からず参ります。さあ、中尉殿、水ですよ」

わるいとは思つたが一気にいった。云うだけのことをいうと急に中尉が可愛想になつて、急いで水筒を中尉の唇にあてがうた。

静かに水は唇の中に流れていった。私は与那嶺にホテル電灯の把手を押させ、中尉の手を握りしめた。冷たい手であった。久しく忘れていた涙が私の頬を濡らした。冷たい手が私の手を弱い力で握り返して来た。嬉しかった。

結果は目に見えていた。呼吸が早くなった。呼吸が少なくて、吸気のみ多くなった。

「ヤマウチ……アリガトウ……」

ああ、忘れ得ない五十九高地よ。全軍。

最期であつた。誰も知らないであらう。この地底で私に手をとられ、華北戦線以来の勇士K中尉の魂は永遠に去つていった。血と死と内臓と暗黒の地獄に奇蹟的に残つていた一つの生命は、静かに去つて行つたのである。与那嶺が纏るホテルの音だけが、壕内にひびいた。

ああ、北支派遣軍以来の独立歩兵第二十一大隊は、ここに組織的戦闘の最後の幕を閉じたのである。

戦友よ、生き残ってくれた戦友よ。どこにいるのか。俺も早く一賭になりたい。一刻も早く会いたい。私は突きあげてくる衝動をどうすることも出来なかつた。

さあ、閣下に報告だ。与那嶺を促して壕を出た。五十九高地の戦友よ。何もしてやれなくて残念だ。さようなら。また、野郎達の歩哨線を逆突破するのだ。私たちは歩き出した。

相かわらず宙空の照明弾は、憎らしい白夜を演出している。

海上に浮かぶ敵の艦船の灯りが、煌々と不夜城のように見えた。

後記

帰途、私は与那嶺を失つた。腹部に艦砲の破片が命中したのである。

「ハラが痛いです……」それが最期の言葉であつた。



沖繩戦線—五月中旬

須崎 治良 八

激しい戦いの連続であった。

身も心も全く疲れきっていた。

五月半ばの沖繩の太陽を、私は真夏のように暑く感じていた。

手と足に銃弾を受けた私は、首里の野戦病院で手当を受けてようとしたが病院内は呻吟する重傷者で溢れていた。私の負傷位はとても軽傷の部にも入らないのであった。

敵の攻撃は物量戦であった。私達は洞窟内で戦っていたが、敵は壕口に近接して手榴弾を投げ、火焰放射を浴びせた。洞窟は次から次へと地獄の様相を呈して壊滅していった。

激烈な戦闘は脳も感覚も麻痺させてしまうのか、私達は恐しいものを恐しいと感じず、ろくに食物も摂っていないのに空腹さえ感じなかった。

しかし、文字通り急激のように飛んで来る銃砲弾は私達に休息の場所を与えず、安息の地は死以外にないとさえ思われた。

どの兵隊も瘦せていた。瘦せ衰えて、虚ろな眼をしていらた。

そんな時、誰からもなく情報が伝わって来た。わが部隊は最後の練まで追いつめられてしまったとか、旅団長は軍司令部からの数度の撤退命令を聞かず、旅団最後の線を死守するそうだとか。

そのうちにまた、西林部隊の者はすぐ軍医の診断を受けよという連絡が洞窟に伝わって来た。

私は軍医の所へ行った。手と足の負傷は激痛を伴ない、破傷風やガス腫の危険を思わせたからである。

軍医は診察して云った。手榴弾を投げる腕が動けばよらしい。すぐ前線へ行け。

私と同じ診断を下された中に、岐阜県の岡田太郎という人もいた。

夕方、敵の砲撃が緩慢になって来た。

私は五人の戦友と同窟を出て前線に出発した。みんな負傷していた。私が一番軽傷であった。

夕焼けの残る空に、「トンボ」が一機舞っていた。敵の観測機である。

私達は各自二発宛の手榴弾をもち、鉄帽は被っていたが小銃は五人に二丁であった。これが第一線に出発する勇士の姿である。

午後十時頃、首里の町の中程に着いた。普通なら三十分の距離であろう。

その時、前方で迫撃砲弾が二、三十発炸裂した。砲撃に對して鈍感になっている私達は、別に怖しいとも思わずに前進を続けた。

二、三百米も歩くと、闇の中で「兵隊さん、兵隊さん……」という声がある。

声の方へ近づくと二十人位の一団が固まって路傍で呻いている。既に死んでいると思われる人もいた。兵隊である。

その中の一人が、水が欲しい、水を下さいと悲痛な声を振りしぼっている。

命綱の水であったが、私は何のためらいもなく水を手えた。この水が、この人の末期の水になったのであろう。

其所から丘の上に出た。

そこには友軍の戦車が破壊されていた。戦友の話によれば戦車のエンジンが始動すると、必ず敵の砲弾が集中するといふ。敵はどうしてそれを知るのであろう。米軍と日本軍との兵器の差かも知れない。

戦車の残骸の中には誰もいなかった。動かなくなったので、捨てていったのだらう。

首里の西の入口の橋の際まで来て友軍の同窟へ入った。私達の部隊の者がいたかと聞くと、西林部隊長は入院さ

れ、部隊も散り散りになっているという。

一同がっかりしたが、特別の計らいで食事にありつけたのは有難かった。小隊長は沼澤准尉であったような気がする。

この同窟は入口は小さいが、中がとても広かった。よく見ると鐘乳洞である。平時なら天然記念物として大切に保存されるのに、國の興亡を賭した戦いでは、内部が損壊されるのも止むを得まい。

旅団長閣下も、この同窟の一部に居られるとのことである。

一休みして午前二時頃、澤紙(たくし)の線へ出発した。

何処をどう歩いたか分らない。夜の明ける頃防空壕のある地点へ到着した。

その防空壕は民間人の造ったものか、岩の隙間を壁で遮蔽した粗末なものであったが、その日一日をこの中で過ごすことにした。

食う物もないので、寝ることにした。ぐっすり寝入った時、物凄い音がして飛び起きた。爆弾投下である。二秒もすると壁が吹っこんだ。岩は粉々に砕けて落ちて来る。生きた心地もない。

早速壁で隙間を掩ったが、又一発、また一発と爆弾を投下され、誰もがこれが最期と観念した。